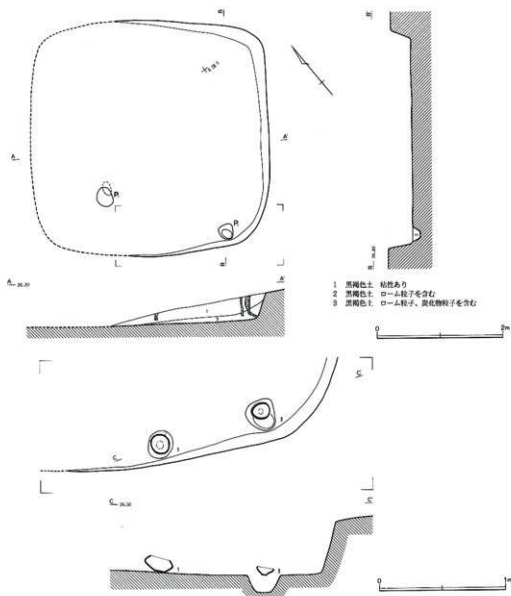
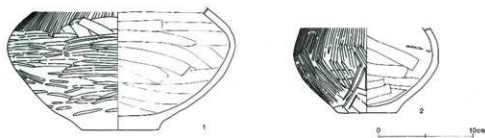




第335図 第1号住居跡



第336図 第1号住居跡出土土器(1)



第337図 第1号住居跡出土土器（2）

第2号住居跡（第338図）

K-29-2・3・7・8グリッドに位置している。台地頂部から谷へと向かう北方向への傾斜面において検出された。確認面の標高は27.5m前後である。耕作機械による筋状の攪乱が著しい。他の遺構との重複はない。

ローム面において黒褐色土にハードロームが混入する範囲が明瞭に捉えられた(図版49)。その範囲は方形を呈し、長径7.5m、短径6.6mであった。主軸はN-50°-Wを指している。このローム混じりの黒褐色土は住居跡の貼床の範囲を示すものと考えられたため、精査を行ったところ、柱穴5つと炉跡が検出された。この確認面は既に床面のわずかに下であり、貼床の掘り方に相当する高さと考えられた。確認された掘り方の深度は10cm以下の浅いもので壁際を中心にして認められた。炉跡の覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多量に含むものであった。深さ10cm、径60cmの不整円形である。柱穴の深度はP1=50cm、P2=54cm、P3=54cm、P4=67cm、P5=12cmである。出土遺物は検出されていない。

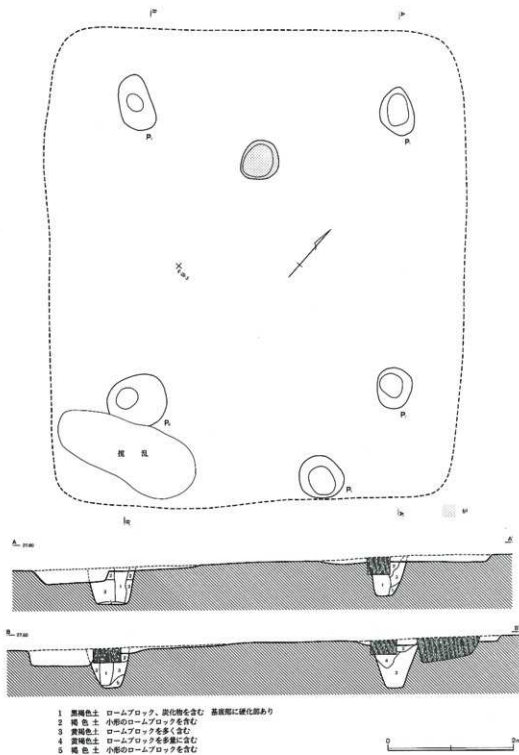
第3号住居跡（第339図）

K-30-15、K-31-11グリッドに位置している。確認面の標高は28.5mである。調査区南部の台地頂部に位置している。第4号住居跡と隣接する。耕作機械による筋状の攪乱が部分的に床面近くまで及んでいるが、他の住居跡と比べると覆土の遺存状況が良好な住居である。東側のコーナーは第14号土壇と重複している。覆土は黒色土、黒褐色土である。

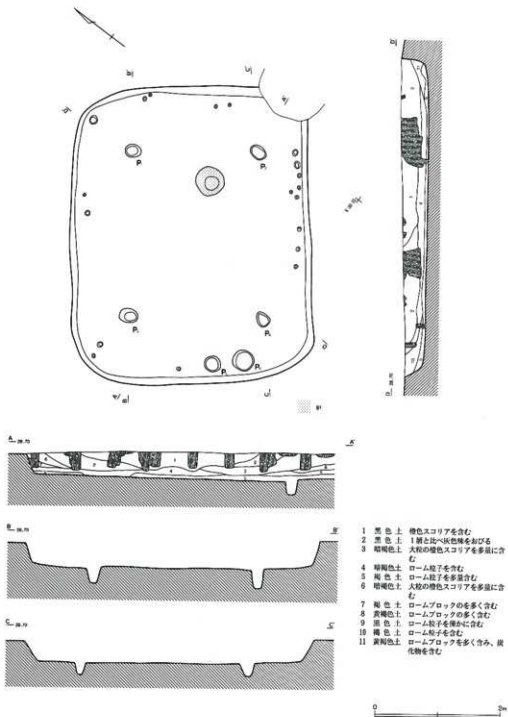
住居跡の平面形は隅丸長方形である。長径4.7m、短径3.8mである。長軸方向はN-53°-Eである。確認面から床面までの深度は40cmである。床面はほぼ平坦で、貼床は見られなかった。

柱穴の深度はP1=32cm、P2=20cm、P3=26cm、P4=26cm、P5=10cm、P6=30cmである。壁際には径10cm以下の小ビットが多数認められた。これらの深度は10cm程度である。炉跡は径45cmの円形であり、掘り込みはきわめて浅い。

第340図に示した土器のうち、2はP6覆土中からの出土である。1・3・4は住居跡覆土中からの出土土器である。



第338図 第2号住居跡



第339図 第3号住居跡

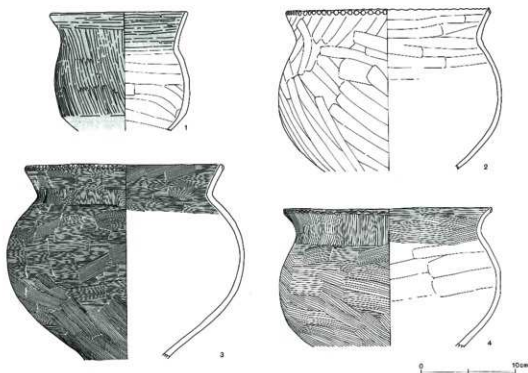
第3号住居跡出土土器 (第340図)

1は小形の甕形土器である。胴部はやや弱くはり、口縁部は外傾して立ち上がる。外面の整形は口縁部から胴部にかけては縦位に、口縁部付近は横位に篋ミガキによる調整がなされている。内面は頸部から胴部を篋ナデ、頸部から口縁部にかけて篋ミガキによる調整を施している。口径14.4cm。胴部最大径は口径に近い。底部を欠損する。色調は赤褐色である。

2～4は台付甕形土器である。いずれも台部を欠損している。

2は球形の胴部で、胴部の中位に最大径がある。口縁部は「く」の字状に外傾して立ち上がる。外面の調整は斜位に篋ナデが行われており、口縁部付近と頸部から胴部にかけての部位ではその方向を異にしている。内面は口縁部から頸部直下に横位に篋ナデによる調整がなされている。口縁部には円形をした刺突が巡らされている。口径21.4cm。胴部最大径23.6cmである。色調は褐色である。

3は台部から直線的に外傾して立ち上がり、胴部中位よりやや上部に胴部最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外傾して立ち上がる。口縁部には刺突が巡らされている。外面は口縁部と頸部直下から胴部下半にかけて横位に刷毛調整が行われている。また胴部下半は斜位に、頸部付近では縦



第340図 第3号住居跡出土土器

位に調整がなされている。内面は口縁部から頸部直下にかけて斜位もしくは横位に刷毛調整がなされている。口径21.8cm、胴部最大径25.2cmである。色調は褐色である。

4は胴部下半から台部を欠損する。胴部の形態は球形に近い。頸部は直立気味になり、口縁部へ外反して立ち上がる。口唇部付近は刷毛調整を横位に行い、刺突状にくぼみを連続させて巡らせている。外面は口縁部から頸部にかけて縦位に、頸部付近から胴部下半にかけて横位、斜位に刷毛調整がなされている。内面は頸部直下に篋ナデ、口縁部から頸部付近に刷毛調整がなされている。口径22.0cm、胴部最大径は23.6cmである。色調は暗褐色である。

第4号住居跡（第341図）

K-30-14・15・19・20グリッドに位置する。発掘区南側の台地頂部付近において検出されている。第3号住居跡と隣接しており、同様な主軸方向を示している。確認面の標高は28.5mである。付近には耕作機械による筋状の攪乱がはげしく入っている。第15号土壇と重複している。確認面には黒色土が長径4.6m、短径3.5mの範囲にわたって認められ、5cm程度の厚みをもって確認された。壁、柱穴等は確認されていない。

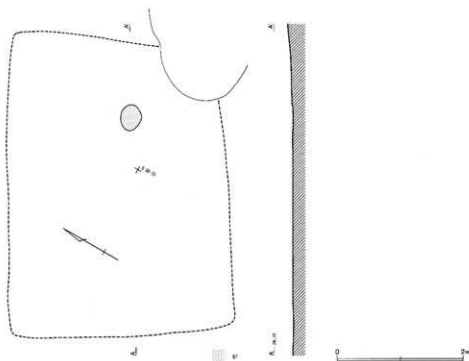
炉跡が認められ、黒色土が他の住居跡の覆土に近似することから住居跡のきわめて遺存状況の悪いものと判断された。炉跡は長径40cm、短径32cmの楕円形で、覆土は焼土粒子が多く含まれる。深度は5cm程度できわめて浅い。遺物の出土はなかった。

第5号住居跡（第342図）

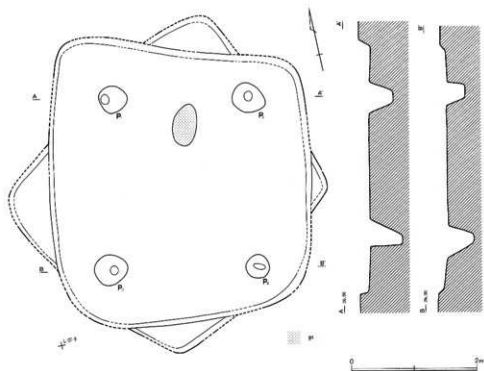
L-27-9グリッドに位置する。遺構の分布が希薄な調査区北北部の先端に位置している。住居跡の東と西には急勾配をなす谷地形が認められる。確認面の標高は16.8mである。

耕作機械による筋状の攪乱が床面まで及んでいるのに加え、表土が薄く地表には篠竹が繁茂しており、遺存状況はきわめて悪かった。

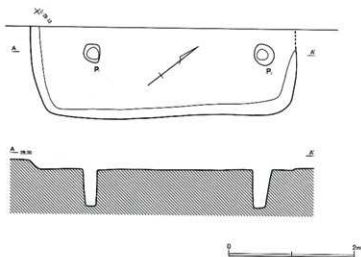
覆土は黒色土で、確認面から床面まで約20cmである。主軸はN-20°-Eである。この主軸と90°異なる方向を軸にして深さ10cmの方形と思われる掘り込みが認められたが、これに対応する柱穴は見られなかった。炉跡は長径65cm、短径40cmの楕円形の範囲に焼土ブロック、粒子が集中していたが明瞭な掘りこみは見られなかった。柱穴の深度はP1=50cm、P2=40cm、P3=42cm、P4=30cmである。出土遺物は検出されなかった。



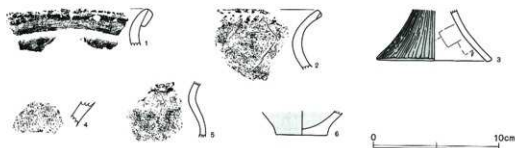
第341図 第4号住居跡



第342図 第5号住居跡



第343図 第7号住居跡

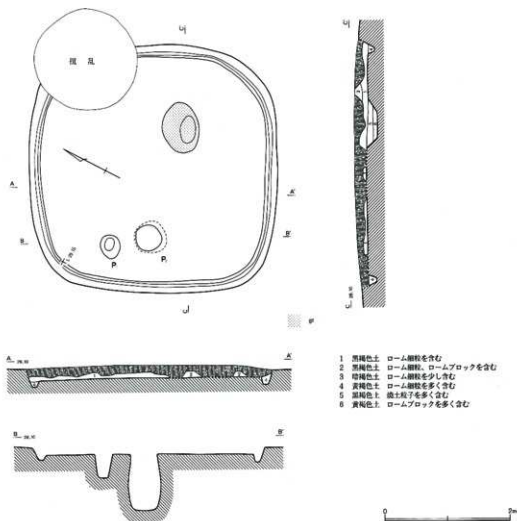


第344図 第7号住居跡出土土器

第7号住居跡・第7号住居跡出土土器（第343・344図）

L-29-13・14グリッドに位置する。確認面の標高は約28mである。大半が市道にかかっていて残存していない。また耕作機械による筋状の攪乱が床面まで及んでいる。主軸は北西の方向を指すものと考えられ、平面形は隅丸方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。南東の壁と柱穴2つを確認した。残存する側の径は4.2mである。確認面から床面までの深度は10cm程度であった。柱穴の深度はP1=58cm、P2=60cmである。

1は折り返し口縁の壺形土器である。口縁部は篋ナデ、折り返し口縁直下と内面は横位に篋ミガキ調整が施されている。2は台付甕形土器である。口縁部に刺突を施す。内外面ともに篋ナデの調整が施されている。3は高環形土器の脚部である。外面は縦位の篋ミガキ、内面は篋ナデによる調整を施す。径は9.4cmである。4は台付甕形土器の台部近くの破片である。5は壺形土器の頸部の破片である。なで形の肩部である。6は小形の壺形土器の底部破片である。底径4cmである。



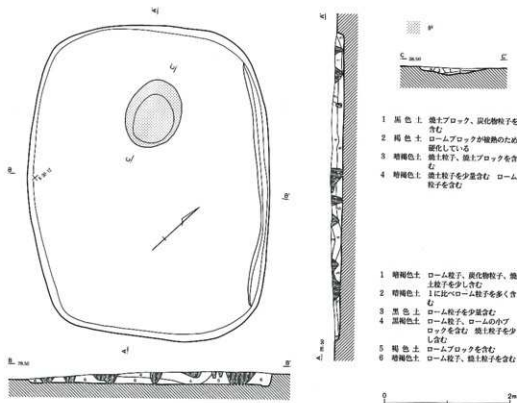
第345図 第8号住居跡

第8号住居跡・第8号住居跡出土土器（第345・346図）

L-29-14・15グリッドに位置する。確認面の標高は28mである。耕作による擾乱が床面まで及んでおり、覆土や壁の立ち上がりは遺存状況が良くなかった。周溝の存在により、形状の把握が可能であった。平面形は径約4mの隅丸方形である。主軸はN-62°-Eである。炉跡は長径80cm、短径58cmの楕円形を呈し、15cm程度の掘り込みが見られた。柱穴の深度はP1=36cm、P2=90cmである。出土遺物は台付甕形土器の台部の破片が2点出土している。刷毛調整が横位、斜位に施されている。内面は篦ナデによる調整がなされている。



第346図 第8号住居跡出土土器



第347図 第11号住居跡 (1)

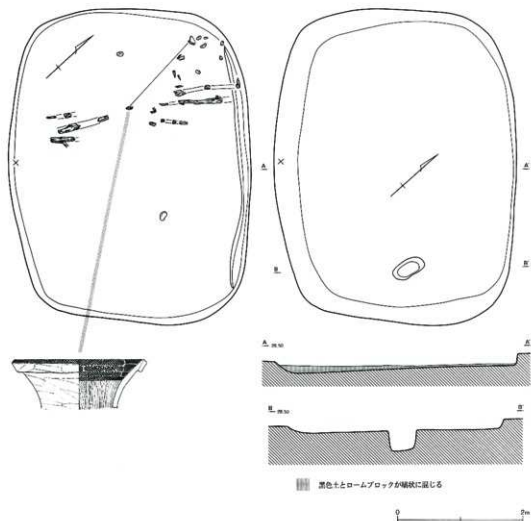
第11号住居跡 (第347・348図)

K-30-12・13・17グリッドに位置している。確認面の標高は28.4m前後である。調査区南部の台地頂部から北西方向へ傾斜していくローム面に位置している。耕作機械による筋状の擾乱が部分的に床面近くまで及んでいる。他の遺構との重複関係はない。

住居跡の平面形は隅丸長方形である。長径5.0m、短径3.9mである。長軸方向はN-45°-Wである。確認面から床面までの深度は20cm程度である。北東壁において壁溝が確認された。5cm程度の深度である。炉跡は長径105cm、短径86cmの楕円形を呈し、10cm程度の浅い掘り込みが見られた。主柱は確認されなかった。

床面からは炭化材が第348図左のように長軸方向の壁面に対して直行するような形で検出されており、床面直上の覆土は炭化物粒子、焼土粒子を含んでいる。北コーナー付近を中心として10cm前後の礫が数点検出されている。第349図の壺形土器は炉跡近辺の床面直上から出土している。

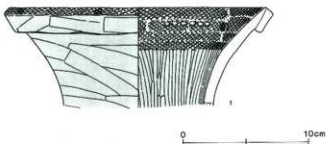
床面はほぼ平坦で、ロームブロックを含む黒色土によって貼床がつくられている。貼床を取り除き掘り方を調査したところ、南東壁近くで柱穴が確認された(第348図右)。柱穴の深度は32cmであった。掘り方は北西に向かってやや傾斜して作られている。



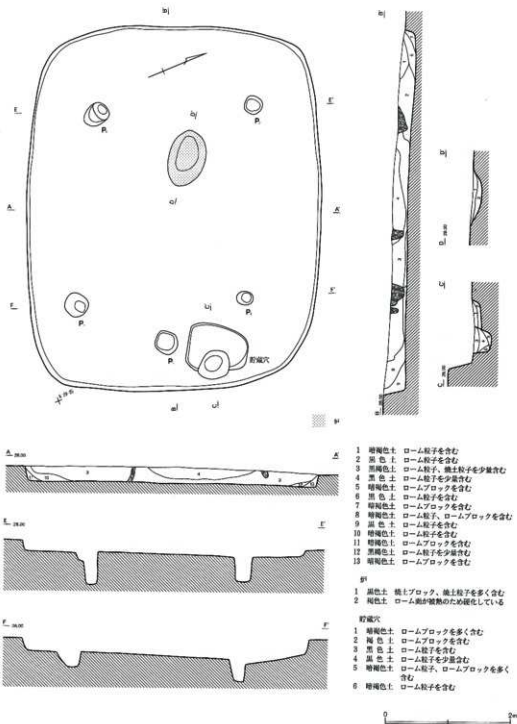
第348図 第11号住居跡(2)

第11号住居跡出土土器 (第349図)

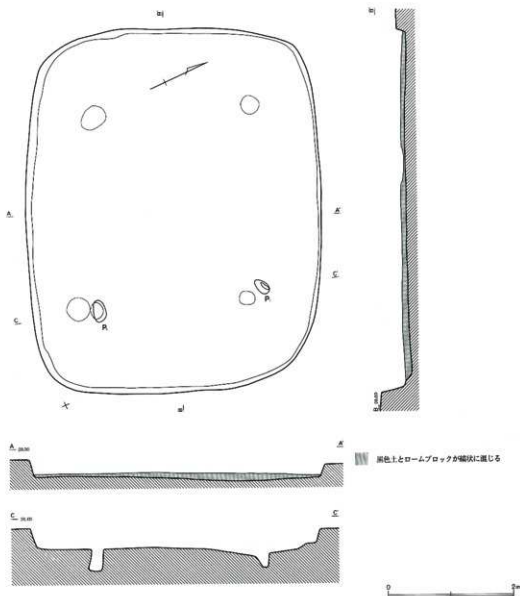
壺形土器の口縁部破片である。折り返し口縁である。口縁部最大径の部分は稜をなす。口縁部、口辺部内面には網目状燃糸文が施されている。外面は横位、斜位に篋ナデ調整、内面は網目状燃糸文施文後、直下から縦位に篋ミガキが施されている。円形の貼付文を内面に施す。赤彩が施されている。口径20.5cmである。



第349図 第11号住居跡出土土器



第350図 第12号住居跡(1)

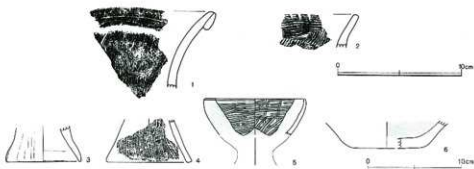


第351図 第12号住居跡(2)

第12号住居跡(第350・351図)

K-29-25・20グリッドに位置している。確認面の標高は約27.9m前後である。調査区南部の台地頂部から北西方向へ傾斜していくローム面に位置している。部分的に床面近くまで攪乱が及んでいるが、他の住居跡と比べると覆土の遺存状況が良好な住居である。他の遺構との重複関係はない。覆土は遺構中央部に黒色土、周辺に黒褐色土が堆積している。

住居跡の平面形は隅丸長方形である。長径5.8m、短径4.7mである。長軸方向はN-68°-Wである。確認面から床面までの深度は20~35cm程度である。炉跡は長径90cm、短径58cmの楕円形を呈し、15



第352図 第12号住居跡出土土器

cm程度の浅い掘り込みが見られた。炉床は熱を受け硬化していた。

床面からは7つの柱穴等が検出されている。深度はP1=50cm、P2=40cm、P3=24cm、P4=27cm、P5=19cm、第350図 C-C'に示したのはいわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、長径96cm、短径76cmである。柱穴と重複している。この柱穴の深度は25cmである。

床面はほぼ平坦で、ロームブロックを含む黒色土によって貼床がつくられている。貼床を取り除き掘り方を調査したところ、P6、P7が掘り方のローム面より検出された。柱穴の深度はP6=34cm、P7=22cmである。貼床の土は10～15cmの厚みをもつ。厚みに多少の幅はあるが床面全体に施されていた。

第12号住居跡出土土器（第352図）

1は壺形土器の口縁部である。折り返し口縁の部分は横位、その直下から縦位に、内面は横位に篋ミガキの調整がなされている。2は台付甕形土器の口縁部である。外傾して立ち上がる口縁部である。横位、斜位に刷毛調整がなされている。口縁部には刻み目を巡らせている。3は台付甕形土器の台部である。外面は縦位、内面には横位に篋ナデが施されている台部底径は8.1cmである。4は台付甕形土器の台部である。外面は縦位に刷毛調整がなされている。台部底径は9.1cmである。5は高坏付形土器の口縁部である。小形の土器である。外面は横位に、内面は横位、斜位に篋ミガキの調整がなされている。6は壺形土器の底部である。大形の壺形土器である。底径は推定で8cmである。

5 その他の遺構

ここで取り上げた7基の土壌は、他の縄文時代の土壌と形態及び規模で明らかに分別できるものを一括した。当該遺構の名称は「落し穴」「落し穴状土壌」等々複数あるが、ここでは石岡（註1）の分類方法に従い「Tピット」と呼称した。

(1) Tピットの説明

SK14（第355図）

平面形は細身の楕円形に近く、長軸は2.95m、短軸1.45m、深さは1.25m、主軸はN-56°-Eである。底面に在る2箇所ピットは0.35m、0.2mである。Dia型。

SK15（第355図）

平面形は細身の楕円形に近く、長軸は3.3m、短軸1.6m、深さは1.2m主軸はN-53°-Eである。底面にピットは無い。Dio型。

SK19（第357図）

平面形は幅広の楕円形に近く底面は北側に偏る、長軸は3.05m、短軸1.1m、深さは1.3m、主軸はN-32°-Eである。底面にピットはみられない。Dio型。

SK20（第357図）

平面形は幅広の楕円形に近く、長軸は2.8m、短軸1.2m、深さは1.1m、主軸はN-20°-Eである。底面にピットはみられない。Dio型。

SK21（第357図）

平面形は細身の長方形に近く隅丸となる、長軸は3.1m、短軸1.7m、深さ1.5m、主軸はN-23°-Eである。底面に在る3箇所ピットは0.4m、0.4m、0.2mである。Dia型。

SK44（第356図）

平面形は細身の楕円形に近く、長軸は3.0m、短軸1.8m、深さは1.2m、主軸はN-38°-Eである。底面に在る1箇所ピットは0.3mである。Dia型。

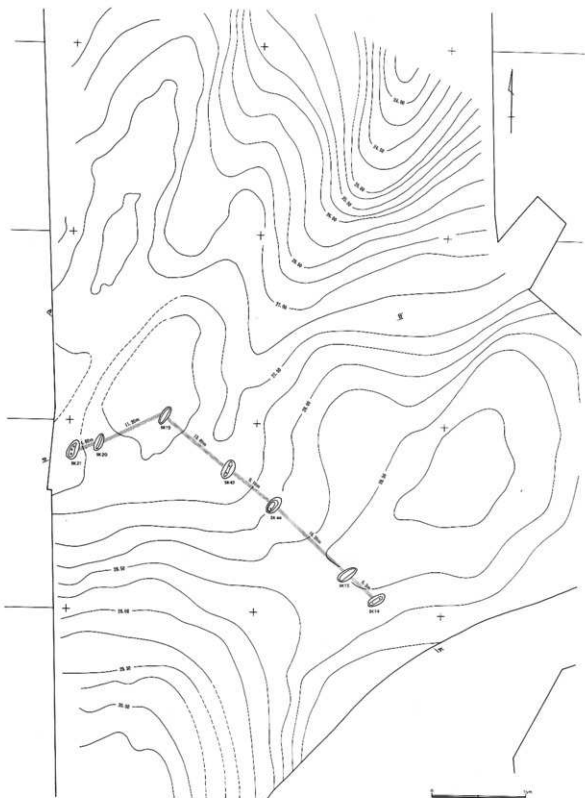
SK42（第356図）

平面形は幅広の楕円形に近く、長軸は3.1m、短軸1.8m、深さは1.1m、主軸はN-25°-Eである。底面に在る2箇所ピットは0.3m、0.45mである。Dia型。

(2) Tピットの配列（第353・354図）

Tピットは浅い谷を横断する様にSK14からSK19の5基が直線上に並び、SK19を交点に117°角度屈曲しSK21までの3基が直線上に並ぶ（註2）。配列方向がSK19で変更するのに対し主軸方向は、N-23°~40°-Eの範囲に収まり同一の方向を指している。一方、SK42からSK15へ並ぶ4基が25°~56°に徐々に扇状に開くのは、地形に対応しているものと思われる。

Tピットの間隔は一定ではなく、2基が1対（註3）になっている。これを東から西にa~cと仮称すると、以下のとおりである。



第353図 Tピットの分布図

a : SK14とSK15。距離は6.3m。分類はD1a型とD1o型。

b : SK44とSK42。距離は9.1m。分類はD1a型とD1o型。

c : SK20とSK21。距離は4.6m。分類はD1o型とD1a型。

次にグループの距離と分類をみると、以下のとおりである。

aとbは16.2m。D1o型とD1a型。

bとSK19は13.4m。D1a型とD1o型。

SK19とcは11.2m。D1o型とD1o型。

グループとグループ間では2～3倍の距離の差がみられ、形態分類は底面にピットを有するものと、有しないものが対になるケースが多いようである。

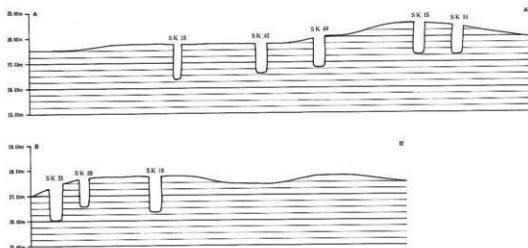
(3) 時 期

当該遺構は遺物が伴わない場合が多く、本遺跡においても、時期を決めるような遺物は出土していない。次に他遺構との重複関係で時期を限定するのであるが、今回の調査で3基の重複例がある。時期の古い方から、SK44と縄文時代後期の第13号住居跡の重複ではTピットの方が住居跡を切っていた。SK14と弥生時代の第3号住居跡では重複部分が現在の耕作によって壊され新旧関係は明確にしえなかった。SK15と弥生時代の第4号住居跡は床面のみが確認された住居であるため新旧関係は明らかにできなかった。以上の点からTピットの帰属時期は縄文時代後期以降と考えられる(註4)。

註1 石岡憲雄 1991「Tピット」について(再論)『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 P479～P508

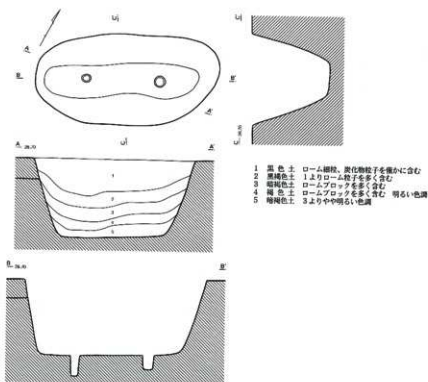
註2 和光市教育委員会(1993年)の調査でSK21の延長線上にTピットが検出されている。

註3 石岡は「2群1対で機能していたかのごとき配列」と指摘している。

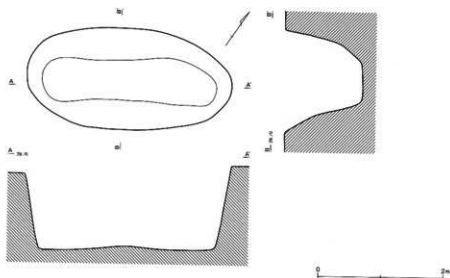


第354図 Tピットの地形横断面図

SK14

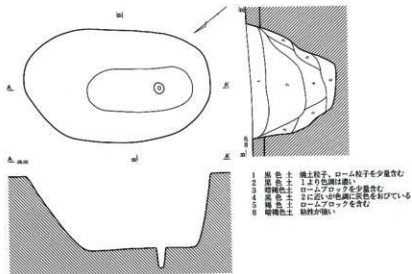


SK15

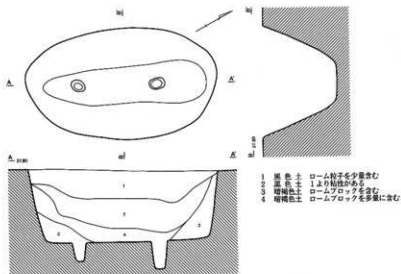


第355図 Tピット (1)

SK44



SK42

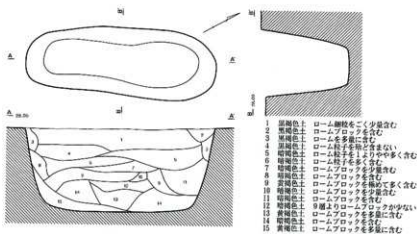


0 2m

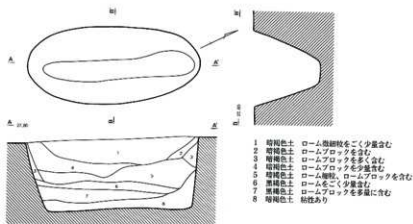
第356図 Tピット (2)

註4 和光市教育委員会（1993年）の調査で弥生時代の住居跡とTピットが重複しており、調査の所見で住居跡がTピットを切っているとの教示を受けた。それによって縄文時代後期から弥生時代の後半という時間幅に限定できる。

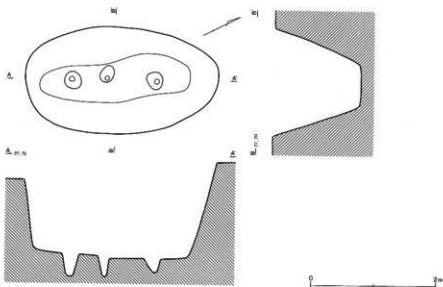
SK19



SK20



SK21



第357図 Tピット (3)

6 小 結

1 先土器時代

先土器時代の遺構はK-27～30グリッドにある谷を挟んで、L-27～29グリッドの西区とJ-29・30グリッドの東区に分けられる。

西区は第IV層下部と第VII層の2枚の文化層が検出されている。便宜的に前者を第1文化層、後者を第2文化層と呼称しておいた。

第1文化層からは石器集中8箇所が検出されている。石器はナイフ形石器と掻・削器等の多数出土し主体をなしている。石核は26・27の盤状石核と22・23の小形の角礫を素材とした黒耀石の石核2種類が特徴的であった。

第2文化層は石器集中13箇所が検出されている。石器集中の分布は南側と北側に大きく分れており、便宜的にグループaとグループcとした。石器の出土点数は多く、今回報告した遺跡群の中で最も規模の大きい文化層である。器種はナイフ形石器が主体を占めて、掻・削器が含まれる。定型的石器以外に大形の縦長剝片が多く、大形の石核、磨石・敲石等内容的に豊富であった。

礫群は8基検出されている。規模は小さく花ノ木遺跡・柿ノ木坂遺跡東区と比較して貧弱であった。帰属時期はほとんどが第1文化層に伴うものと考えられる。

東区は第IV層下部と第VI層から石器群が検出されている。便宜的に前者を第1文化層、後者を第2文化層と呼称した。

第1文化層からは石器集中7箇所が検出されている。石器の出土点数は少ないが、ナイフ形石器2点と多様な掻・削器が出土している。

第2文化層では石器集中7箇所が検出されている。ナイフ形石器は1点と少ないが、透明度の高い良質の黒耀石を素材とした縦長剝片が複数出土している。また、メノウの大形縦長剝片が集中から少しはなれて単独で出土している。

礫群は10基検出されている。分布は調査区の南東部に偏り第1文化層の石器分布とほぼ重なる。礫群間の接合は活発で第10号礫群以外は同時存在していた可能性が高い。

2 縄文時代

早期の遺構として炉穴1基が検出されている。前期、中期の土器は遺構外等から検出されたが、遺構は検出されなかった。

後期の遺構には住居跡3軒、柱穴列1棟がある。出土土器は堀之内1式にほぼ限定されており、複数の土器型式に及ばない短期の小規模な集落跡と言える。当遺跡の地形は馬の背状の小規模な台地であり、周囲は北、西、東から南東にかけて谷に開析された急斜面の地形となっており、独立した地形を有している。南へは標高を増しているが遺構の分布は途切れるようである。弥生時代の集落についても同様なことが言えるが、こうした比較的限定された地形の中に立地する集落の大部分を調査したと言える。

和光市内の縄文時代後期前葉の土器を出土している遺跡として丸山台遺跡、義名山遺跡、吹上遺跡、四ツ木遺跡などが知られている。特に丸山台遺跡の土地区画整理事業地内においては堀之内1式～加曾利B1式期の住居跡、掘立柱建物跡、土壇等が多数検出されており、集落の全体像が明らかになっている。丸山台遺跡と比較すると先述のように当遺跡は小規模な集落であると言える。

なお柱穴列は長方形とも亀甲形ともつかないものであったが炉跡を伴う点が特筆される。また3軒の住居跡の周辺に分布する32基の土壇の出土遺物は少なく時期決定の決め手をやや欠いているが、フラスコ状土壇など当地域においては後期に特有な形態が認められる点、覆土等の共通性からほぼ当期の所産と考えている。短時期ではあるが縄文時代後期前葉の集落を構成する遺構を具備した集落と言える。

3 弥生時代

弥生時代の住居跡は8軒が検出された。遺物量は少なく、遺存状況の不良な住居跡もあり、時期決定の決め手に欠けるものが多い。出土している土器はいずれも後期の土器である。住居跡の形態は隅丸の長方形（第2・3・4・11・12）もしくは方形（第5・8号住居跡）のものであり、楕円形のものは認められなかった。また炉跡はいずれも浅い地床炉であり、いわゆる火皿状のものは検出していない。

弥生時代の住居跡は縄文時代の住居跡の分布に比べると分布域が広い。今回の調査区に隣接して、和光市教育委員会による調査が数カ所で行われており、南西に隣接する地点において、1軒の住居跡が検出されている。隅丸長方形の形態で後期に属する住居跡である（鈴木 1994）。

当遺跡は環濠を持たない比較的小規模な集落跡である。環濠集落として和光市内では午山遺跡が知られており、今回の東京外環自動車道の調査によって花ノ木遺跡においても上之郷遺跡へとつながる環濠の一部が検出されている。また、周辺にも弥生時代集落が多数分布する地域である。越戸川をはさんで和光市の対岸の朝霞市には台の城山遺跡があり、白子川対岸の板橋区ではいくつかの環濠集落や集落跡の存在が近年の調査で明らかになっている。

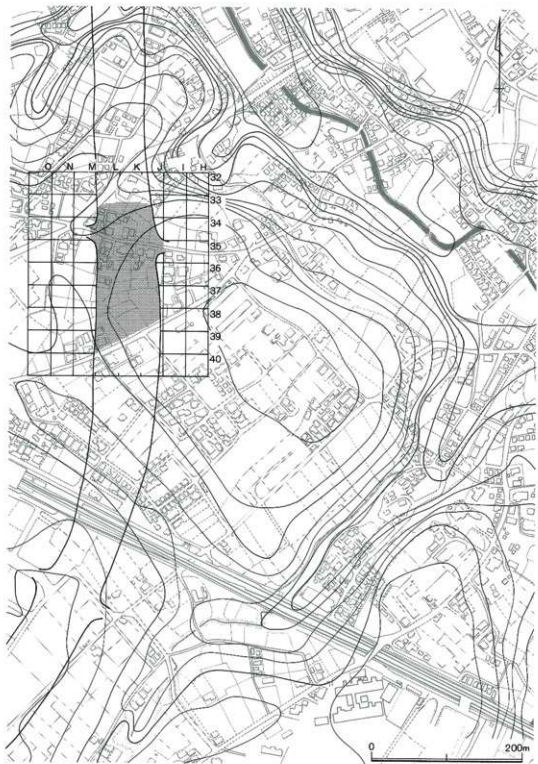
参考文献

- 鈴木一郎 1994 『埼玉県和光市柿ノ木坂遺跡』和光市教育委員会
鈴木敏弘他 1993 『埼玉県和光市午山遺跡-発掘調査報告書-』和光市教育委員会
竹石健二 野中和夫 橋本真紀夫他 1992 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅰ』
竹石健二 野中和夫 橋本真紀夫他 1993 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅱ』
和光市史編さん室 1981 『和光市史 資料編一 自然 原始 古代 中世 近世』

MIZUKUBO

水久保遺跡





第358図 水久保遺跡位置図

VII 水久保遺跡の調査

1 遺跡の概要

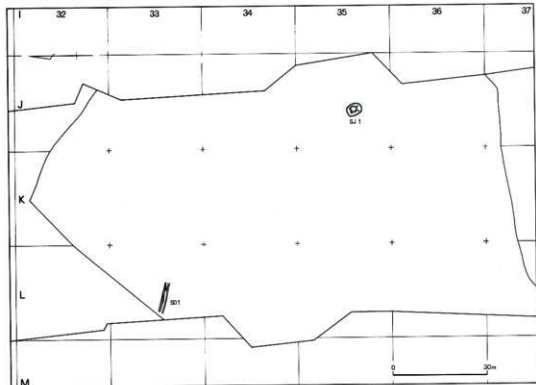
和光市新倉1丁目に所在する。水久保遺跡は市内を北西の方向に流れる谷中川の左岸に面しており、同様な立地を示す柿ノ木坂遺跡は支谷を隔てて北に位置している。現状では2つの遺跡を隔てる支谷に県道新倉蕨線が通っている。遺跡の南側は支谷を隔てて、丸山台遺跡が所在しており、現状ではその間を東武東上線が走っている。遺跡とその周辺は、東上線と和光市駅とごく近い位置にあるため、宅地化が著しい。調査区の現況は大半が宅地であり、一部畑となっていた。宅地及び畑地の耕作による掘削等により遺跡の遺存状況は良好なものではなかった。

調査対象区は緩やかな傾斜を示す台地上を縦断している。昭和63年度から第1次調査に着手し、範囲を確定する調査を実施しており、平成元年度、2年度に発掘調査を実施している。遺構は縄文時代中期の住居跡1軒と中・近世の溝1条が検出された。遺構外からは縄文中期の土器片が出土している。

2 遺構と遺物

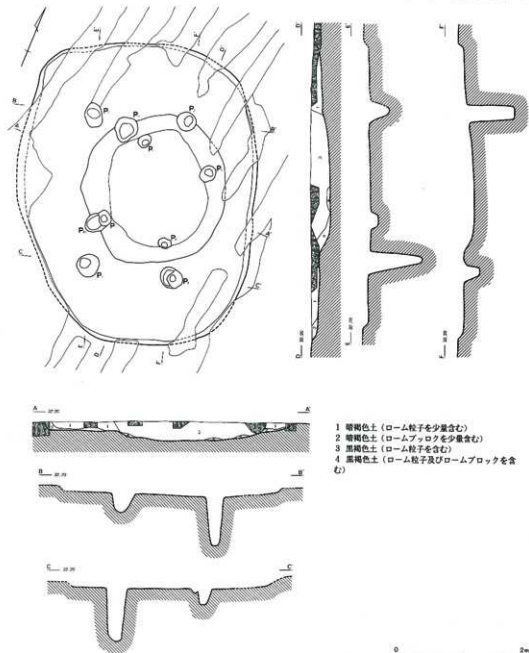
第1号住居跡（第360図）

J-35グリッドに位置している。遺構確認面の標高は32mである。耕作機械による攪乱が南北に床

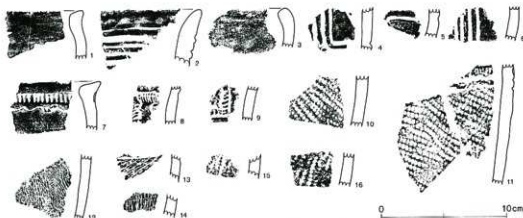


第359図 水久保遺跡全体図

面まで及んでおり、遺存状況は良くなかった。平面形は不整の長方形を呈しており、主軸はN-16°-Wを指している。規模は主軸方向が4.7m、短軸方向が3.8mである。遺構の中心付近には黒褐色土、壁の内側には暗褐色土の覆土が見られた。土壌との重複の可能性も考慮したが、近辺に土壌はなく、住居跡のほぼ中央が掘り込まれている点などから、2段に掘り込みを持った遺構として報告する。2段目の掘り込みは径2.3mのほぼ円形を呈している。深度は1段目の床面までは0.15mであり、きわめて浅い。2段目の床面は断面が皿状に掘り込まれており、最も深い中央部で遺構確認面から0.



第360図 第1号住居跡



第361図 第1号住居跡出土土器

3mである。炉跡は検出されていない。

柱穴の深度はP 1=31cm、P 2=77cm、P 3=84cm、P 4=25cm、P 5=56cm、P 6=46cm、P 7=51cm、P 8=49cmである。平面的な配置からみて、P 1～P 4を4本主柱とする構造が推定される。これより小規模なP 5～P 8も方形の配置が推定されるが、先のP 1～P 4や住居の平面形とは主軸が異なっている。P 9は深度18cm、P 10は19cmの浅い柱穴であった。

遺物は少量であるが覆土中に点在していた。計40点の土器片が出土した。また床面からの出土遺物はなかった。覆土中の土器片から、縄文時代中期の勝坂式後半の遺構と考えられる。

第1号住居跡出土土器（第361図）

第361図1・3は口縁部が内湾する形態の深鉢形土器である。口縁部は無文である。2は外形する口縁部の形態で、横位の沈線文を施す。4～6は深鉢形土器の胴部の破片である。多条の沈線文により区画文を施している。7は口縁部に角押文と波状沈線を巡らせる。8・9は胴部の破片で、区画文に沿って爪形文、波状沈線文を施している。10・11・15・16は地文に縄文を施した深鉢形土器の胴部破片である。10は単節RLを横位に施文する。爪形文、波状沈線文を施す。11・15・16は単節LRを施す。12は擦糸文、13・14は細沈線を地文とした胴部破片である。

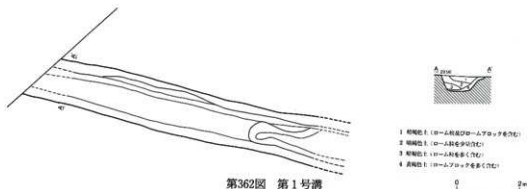
第1号溝（第362図）

L-33グリッドに位置する。遺構確認面の標高は29.5mである。柿ノ木板遺跡との間の谷地地形に相当する部分から検出されている。検出された溝の長さは8m、幅は1.5m前後である。深度は0.5m～0.7mあり、西側に向かうにつれ深度が増している。遺物は検出されていない。

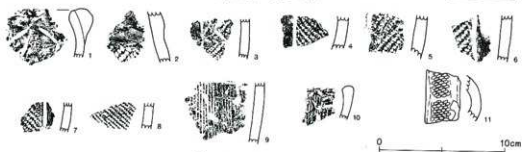
グリッド出土土器（第363図）

遺構外から縄文時代中期中葉の加曾利E式土器が出土している。

第363図1はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。コブ文、沈線文を施している。2



第362図 第1号溝



第363図 グリッド出土土器

は口縁部近くの破片で、隆帯が施される。3～8は胴部破片で磨消縄文を縦位に施す。9・10は条線文を施している。9は胴部、10は口縁部の破片である。11は両耳壺の耳の部分である。

3 小 結

水久保遺跡の調査区は遺構確認面が擾乱によってかなり荒れた状態にあった。もっとも遺物の量も少ない点から遺構自体の分布も元来少なかったものと考えられる。谷中川にやや近づいた調査区東側の台地は縄文時代中期の遺跡として知られる妙蓮寺遺跡などとも隣接しており、遺跡の主体はそちらにあるのかも知れないが詳細については今後の課題である。

第1号住居跡の検出は成果のひとつであろう。和光市内の縄文時代中期の遺跡として、吹上遺跡、妙蓮寺遺跡などが知られているが、現在までに発掘された遺構は、勝坂式終末から加曾利E式が主体を占めている。水久保遺跡第1号住居跡は出土遺物が少ない点、炉跡がなく2段に床面を掘り込む構造を持つ点からみて、有段竪穴遺構等と呼ばれている遺構に類似するものと考えられる(註)。埼玉県では、2段に掘り込みを持つ住居跡がどの程度の頻度で認められるのかなど不明な点も多く、集落の中での位置づけ等を含め今後の課題としたい。

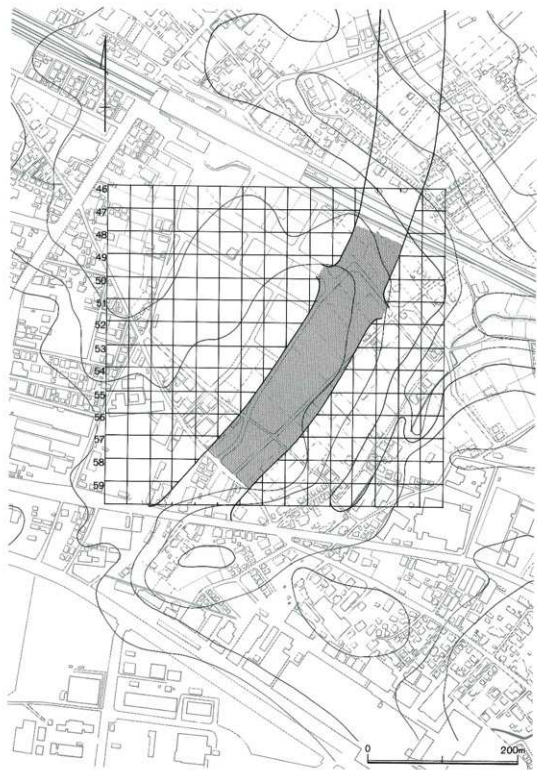
(註) 今橋浩一 1985 「阿玉台文化の一側面-二段床構造住居跡の検討-」『古代探源』Ⅱ

中野修秀 1985 「有段竪穴遺構に関する覚書-関東地方縄文中期における異系統の竪穴住居跡」『日本考古学研究集報』Ⅶ他

MARUYAMADAI

丸山台遺跡





第364図 丸山台遺跡位置図

VIII 丸山台遺跡の調査

1 遺跡の概要

丸山台遺跡は和光市下新倉に所在している。花ノ木、向原、柿ノ木板、水久保の4遺跡は、いずれも和光市内を流れる谷中川に面しており、谷中川の低地とその支谷によって樹枝状に形成された開析谷によって分立した台地上に遺跡が立地していた。丸山台遺跡は谷中川の支流である谷戸川左岸の緩斜面に立地しており、縄文時代後期、堀之内1式期から加曾利B1式にかけての集落跡であることが土地区画整理事業に伴う発掘調査によって明らかになっており、その成果はすでに報告書として刊行されている(註)。この報告によると谷戸川は縄文時代後期には「既に谷頭の埋積は進行し……湧水地点は下流側に移動していたかあるいは湧水量が少なくなっていたことが考えられ」として、埋積の進んだ谷戸川の湧水点が丸山台遺跡近辺にあったとしている。丸山台遺跡の北には谷を隔てて水久保遺跡が所在しており、現状では東武東上線によって隔てられている。一方、丸山台遺跡の東方には義名山遺跡、中丸遺跡、浅川遺跡がある。谷戸川を挟んだ対岸の義名山遺跡は丸山台遺跡よりも早く、縄文時代後期の称名寺式段階から集落の形成が始まっている。丸山台遺跡以南では約1.5km離れて、白子川沿岸の遺跡が分布している。また南西約1kmには縄文時代中期後葉の土器が出土した向山遺跡がある。

東京外環自動車道による発掘対象区は、27800㎡の広い範囲に及んだが、全般には平坦な地形の台地部分である。土壌39基、溝30条、先土器時代の石器集中地点2箇所が検出された(第365図)。

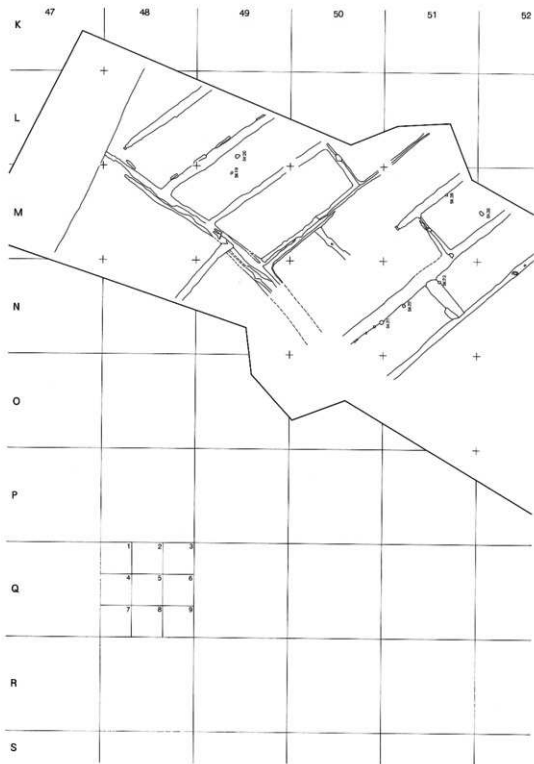
先土器時代の調査は溝等を避けながら、ソフトローム(Ⅲ層)からハードローム上面(Ⅳ層)を中心として実施した(第366図)。Q-55、R-56グリッドにおいてソフトローム下部から2つの石器集中を検出した。石器集中1は黒曜石の碎片を中心としていた。石器集中2は黒曜石の碎片を中心にナイフ形石器の欠損品が1点出土している。

縄文時代の遺構が認められたのは調査区南東部分であり、O-54~56、P-55~57、Q-56・57グリッドがこれにあたる(第365図)。土壌が29基検出されており、この部分が丸山台遺跡縄文後期集落の西側のはじと考えられる。土壌が検出されたのみで、住居跡、建物跡等は認められなかった。後期集落の主体は東京外環自動車道による対象区以東の土地区画整理事業に伴う発掘調査区にあり、谷戸川の谷へと続く斜面部に立地している。縄文時代の遺構以外に時期不詳の土壌が認められた。また溝については北西方向に主軸をとる畑の区画溝である。全体図にはその位置を示したが現在の畑の区画の方向、位置とも共通する部分があり、近年の所産として個々の報告は割愛した。

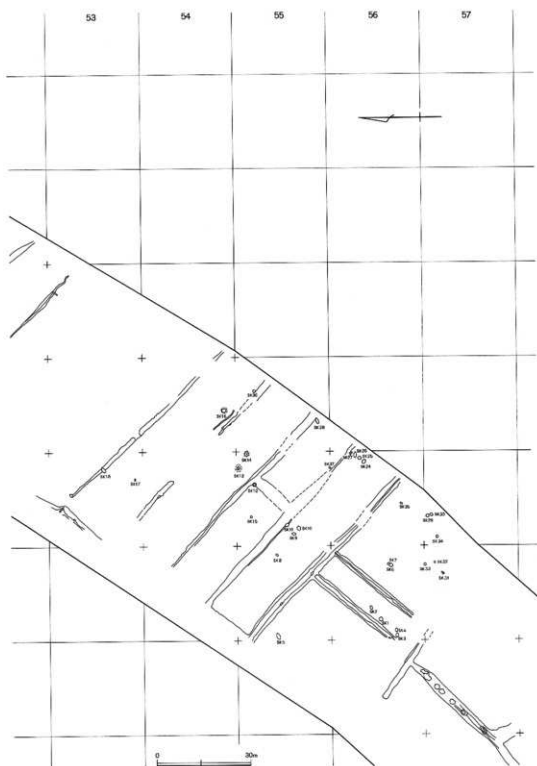
なお、一辺30mのグリッド内に一辺10mの小グリッドを設け、1から9までの番号を、それぞれ北東のすみから1、2、3……と付けて調査を行った(第365図)。

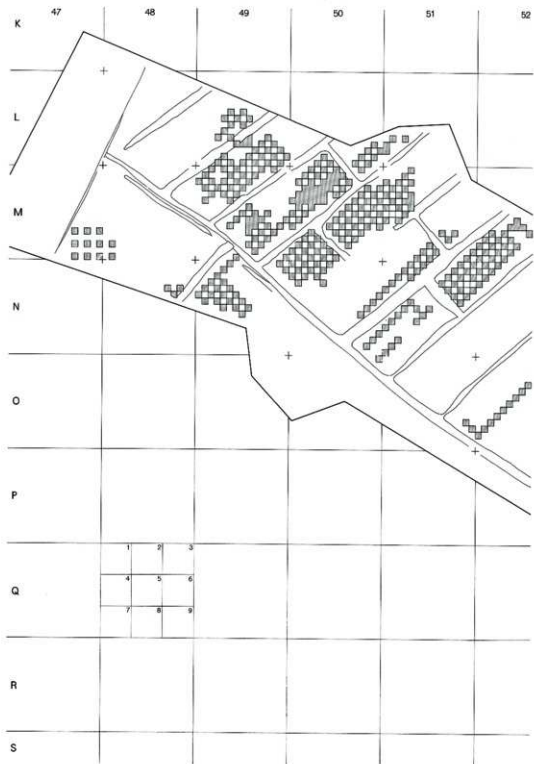
(註) 竹石健二 野中和夫 橋本真紀夫他 1992 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅰ』

竹石健二 野中和夫 橋本真紀夫他 1993 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅱ』

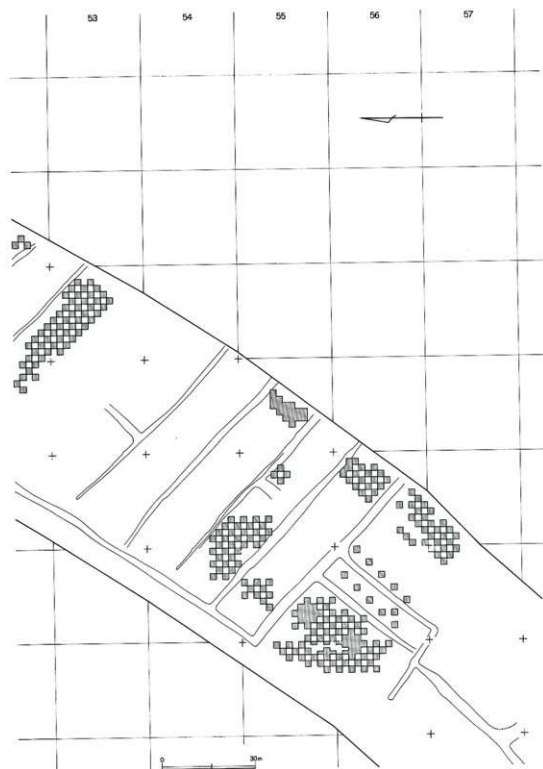


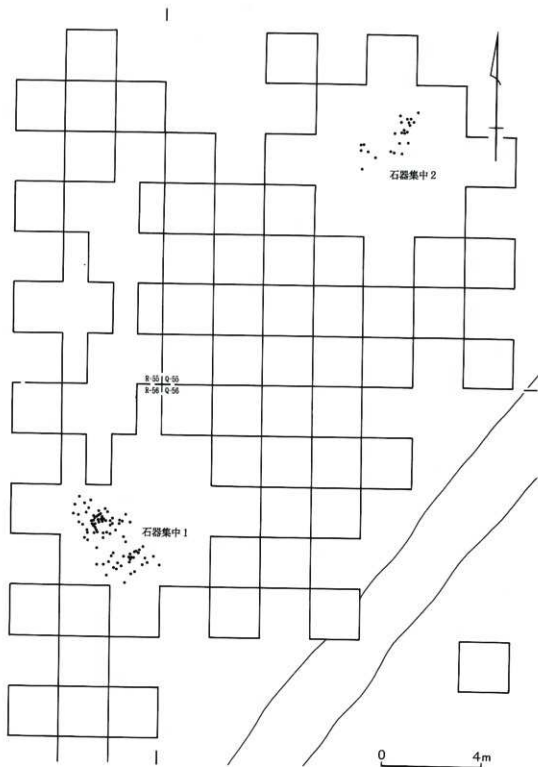
第365図 丸山台遺跡全体図





第366図 先土器時代調査範囲





第367図 先土器時代遺物分布図

2 先土器時代の遺構と遺物

概 要

丸山台遺跡では広範囲に先土器時代の遺物を検出するための調査を行った(第367図)。その結果、Q-55グリッドとR-56グリッドの2か所から石器集中が検出された。また、ナイフ形石器等の石器が調査区の全域から点々とはあるが出土している。

層位(第368図)

土層断面図は石器集中1の西側面と東西面が通して掲載してある。

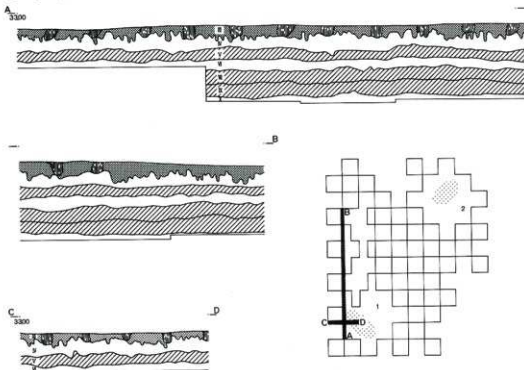
A-Bラインは台地を南北方向に入れている。層位の堆積は僅かに北側(B)に傾斜している。

C-Dラインは石器集中1にかかるように東西に短い範囲に入れている。堆積状態はほとんどフラットである。

石器が出土した層位は、いずれも第Ⅲ層の下部からであった。

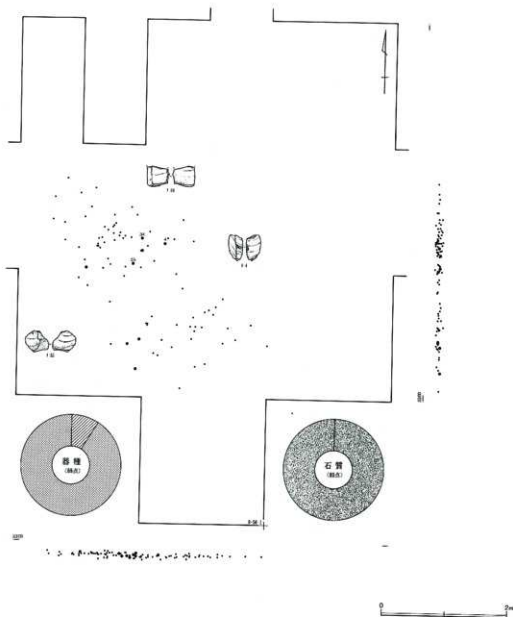
石器はノギスによって長さ・幅・厚さの3項目を計測した。しかし、微細な碎片に関してはノギスによる計測は難しく、方眼紙上に描いた正方形によって下記のようなグループに分類し、長さの項目に掲載した。

- ・ A = 2 × 2 mm
- ・ B = 5 × 5 mm
- ・ C = 10 × 10 mm
- ・ D = 10 mm ~



第368図 土層断面図

0 4m



器 種	石 質	器 種
▲ ナイフ形石器	● 黒曜石	▲ ナイフ形石器
● 剥片	● メノウ	● 剥片
● 砕片	■ 頁岩	● 砕片

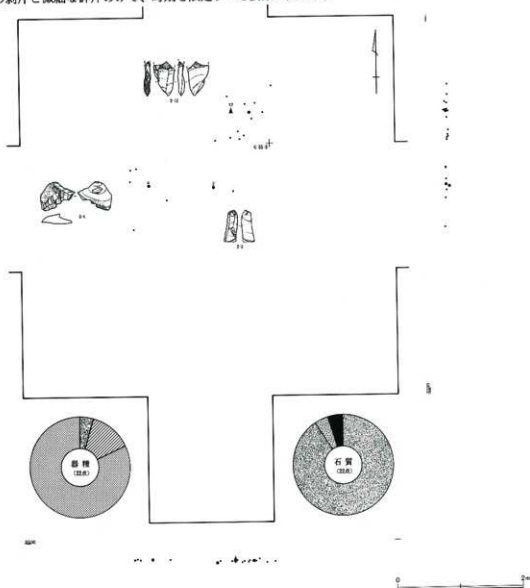
第369図 石器集中1

石器集中1 (第369図)

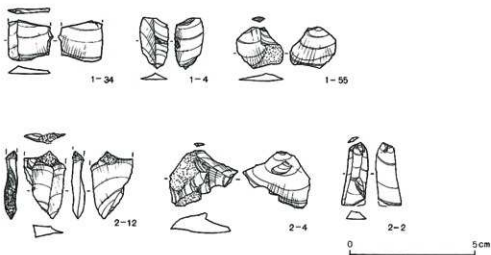
R-56-1 グリッドに位置する。遺物は南北約3.5m、東西約3.5mの北西に片寄った楕円形状に拡がり、その範囲でさらに北西側に密集する部分a、南東側にまとまるbの2つに分けることができる。石器は図示した3点の剥片はaにまとまっている。bにおいても剥片は出土しているがいずれも小形のものである。

石器の総数は89点と多いが、器種組成は剥片8点と碎片81点、使用されている石材は全て黒曜石と非常に単純な内容であった。

本石器集中の帰属時期は、層位的には石器検出が第Ⅲ層下部である。しかし、石器の内容は小形の剥片と微細な碎片のみで、時期を限定すべき要素に欠ける。



第370図 石器集中2



第371図 石器集中出土石器

石器集中2（第370図）

Q-55-9グリッドとQ-55-8グリッドの境に位置する。遺物は南北約2m、東西約2.5mの北西に片寄って細長い楕円形状に分布している。石器集中の中にはQ-55-9グリッドの杭の周辺に密集する部分（a）と、その南東側に散漫に広がる部分（b）が見られる。石器の分布はナイフ形石器1点と剥片1点が（a）、図示した剥片2点が（b）となり、剥片類はどちらかに偏る傾向は見られない。

石器の総数は22点である。器種組成はナイフ形石器1点、剥片3点、碎片18点、石材は黒耀石20点、頁岩1点、メノウ1点である。石器集中1と比べると器種組成及び石材組成ともにバラエティーが増えるが、全体に単純な内容である。

本石器集中の帰属時期は、石器集中1同様層位的には石器検出が第III層下部である。しかし、定型的石器としてナイフ形石器が検出されており、本来の文化層では第III層より第IV層中と考えられる。また、石器集中1に関しても本石器集中と区別する要因が無い場合、合わせて第IV層に帰属時期を求めたい。

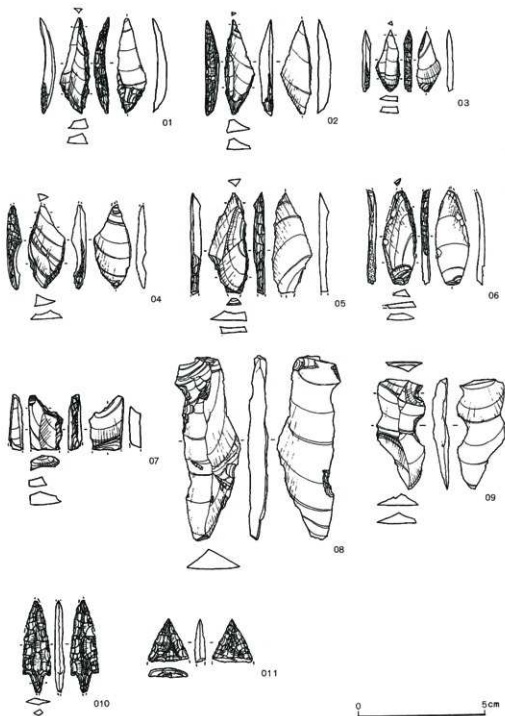
石器集中出土石器（第371図）

ナイフ形石器（第371図）

2-12は上半部を不純物の部分から大きく欠損する。下位方向からの縦長剥片を素材に用いており、打面部とバルブの厚さを除去するように調整加工が正面→裏面方向に施されている。

剥片（第371図）

いずれも小形のもので、本来なら碎片との区別に苦慮する。しかし、本遺跡において碎片としたものが微細である点から区別ができ、剥片として図示しておいた。



第372図 グリッド出土石器

グリッド出土の石器 (第372図)

ナイフ形石器 (01~07)

01は上位方向からの縦長剥片を素材に用いている。外形は右側縁を底辺とした三角形となる。正面を構成する剥離面は主要剥離面の剥離方向と一致する。刃部は左刃で先端角25°、側刃角128°である。調整加工は右側縁が両面からの対向剥離で厚く作られ、左側縁は通常の Blunting、そして裏面に平坦剥離が施されている。

02は上位方向からの縦長剥片を素材に用いている。外形は左側縁を底辺とした二等辺三角形となる。正面の剥離面は主要剥離面の剥離方向と一致している。刃部は右刃で先端角30°、側刃角134°である。調整加工は左側縁の基端部から先端まで急角度の規格的剥離が施され、右側縁は通常の Blunting が施されている。

03は上位方向からの縦長剥片を素材に用いている。外形は右側縁を底辺とした三角形となる。正面の剥離面は主要剥離面の剥離方向とほぼ一致する。刃部は左刃で先端角40°、側刃角129°である。調整加工は右側縁の基端部から先端まで急角度の規格的剥離が施され、特に先端付近のバルブの厚い部分は入念に施されている。左側縁は通常の Blunting、裏面に平坦剥離が施される。

04は上位方向からの縦長剥片を素材に用いている。外形は菱形状を呈し、左右対称形に近い。刃部は右刃で先端角49°、側刃角144°である。調整加工は左側縁の下半部の薄い部分は通常の Blunting、先端部付近の厚い部分は急角度の規格的剥離が施され、右側縁は通常の Blunting が施されている。

05は基端部を欠損する。素材剥片は上位方向からの縦長剥片を用いている。外形は右側縁を底辺とした三角形状を呈しており、左側縁の下半部は内側に僅かに湾曲している。正面の剥離面は主要剥離面と90°異なり右側縁方向からの剥離である。刃部は左刃で先端角59°、側刃角133°である。調整加工は右側縁及び左側縁共に通常の Blunting が施されている。

06は先端を若干欠損する。下位方向からの縦長剥片を素材に用いている。外形は両側縁が外側に緩く湾曲する尖頭器状を呈し、左右対称形である。正面の剥離面は主要剥離面と90°異なり、左側縁に原石面を残している。調整加工は右側縁及び基端部付近に通常の Blunting が施されている。

07は下半部を正面からの力によって欠損する。正面の剥離面と主要剥離面の剥離方向は一致する。調整加工は先端及び右側縁に通常の Blunting が施されている。

削器 (08~09)

08は縦長剥片を素材に、左側縁上半部にノッチ状に刃部加工が施されている。

09は打面部を欠損する。縦長剥片を素材に、右側縁中程にノッチ状に刃部加工が施されている。

有茎尖頭器 (010)

先端と基端部を欠損する。調整加工は表裏とも両側縁から施され、横断面は菱形状である。

尖頭器 (011)

下半部を大きく欠損する。石鏃の可能性も高い。

第84表 先土器時代 石器一覽

石器集中1

番号	グリッド	北-南[m]	西-東[m]	標高[m]	器 種	長さ[m]	幅[m]	厚さ[m]	重量[g]	石 質	備 考
1	R-56-1	5.18	8.62	32.53	碎片	—	—	—	0.46	黒耀石	
2	R-56-1	5.52	8.78	32.47	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
3	R-56-1	5.48	8.47	32.50	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
4	R-56-1	5.56	8.33	32.57	剝片	2.05	1.10	—	0.47	黒耀石	
5	R-56-1	5.37	8.08	32.59	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
6	R-56-1	5.60	8.06	32.50	碎片	—	—	—	0.09	黒耀石	
7	R-56-1	5.83	8.17	32.56	碎片	—	—	—	0.16	黒耀石	
8	R-56-1	6.09	7.69	32.60	碎片	—	—	—	0.15	黒耀石	
9	R-56-1	6.13	6.96	32.57	碎片	—	—	—	0.18	黒耀石	
10	R-56-1	6.25	7.10	32.59	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
12	R-56-1	7.07	7.94	32.57	剝片	—	—	—	0.58	黒耀石	
13	R-56-1	7.15	7.75	32.52	剝片	—	—	—	0.32	黒耀石	
14	R-56-1	7.17	7.49	32.57	碎片	—	—	—	0.30	黒耀石	
15	R-56-1	7.55	7.88	32.49	剝片	—	—	—	0.55	黒耀石	
16	R-56-1	6.50	7.47	32.48	碎片	—	—	—	0.08	黒耀石	
17	R-56-1	5.47	8.37	32.45	碎片	—	—	—	0.03	黒耀石	
18	R-56-1	5.20	6.55	32.68	碎片	—	—	—	0.08	黒耀石	
19	R-56-1	5.64	6.96	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
20	R-56-1	5.95	7.08	32.65	剝片	—	—	—	1.41	黒耀石	
21	R-56-1	5.96	7.35	32.62	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
22	R-56-1	5.82	7.42	32.59	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
23	R-56-1	5.62	7.27	32.60	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
24	R-56-1	5.62	7.27	32.64	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
25	R-56-1	5.49	7.28	32.67	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
26	R-56-1	5.90	7.47	32.68	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
27	R-56-1	5.45	7.70	32.62	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
28	R-56-1	5.45	7.60	32.63	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
29	R-56-1	5.25	7.55	32.62	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
30	R-56-1	5.00	7.80	32.64	碎片	—	—	—	0.20	黒耀石	
31	R-56-1	5.47	7.80	32.63	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
32	R-56-1	5.93	7.71	32.58	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
33	R-56-1	5.67	7.97	32.61	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
34	R-56-1	5.48	7.97	32.64	剝片	2.85	1.80	—	0.87	黒耀石	
35	R-56-1	5.53	6.75	32.62	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
36	R-56-1	6.84	8.54	32.57	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
37	R-56-1	6.72	8.79	32.58	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
38	R-56-1	7.06	8.77	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
39	R-56-1	6.94	8.82	32.64	碎片	—	—	—	0.07	黒耀石	
40	R-56-1	6.63	8.98	32.56	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
41	R-56-1	6.60	9.05	32.57	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
42	R-56-1	7.12	9.27	32.62	碎片	—	—	—	0.04	黒耀石	
43	R-56-1	6.88	9.35	32.60	碎片	—	—	—	0.03	黒耀石	
44	R-56-1	6.27	8.62	32.61	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
45	R-56-1	6.83	9.71	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
46	R-56-1	5.65	7.30	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
47	R-56-1	5.58	7.26	32.63	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
48	R-56-1	5.36	7.42	32.60	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	

番号	グリッド	北-南[m]	西-東[m]	標高[m]	器 種	長さ[m]	幅[m]	厚さ[m]	重量[g]	石 質	備 考
49	R-56-1	5.48	7.33	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
50	R-56-1	5.52	7.53	32.66	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
51	R-56-1	5.41	7.51	32.61	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
52	R-56-1	5.30	7.50	32.57	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
53	R-56-1	5.40	7.62	32.54	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
54	R-56-1	5.48	7.66	32.54	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
55	R-56-1	5.88	7.83	32.54	剝片	1.70	1.85	—	0.68	黒耀石	
56	R-56-1	5.68	7.97	32.54	剝片	—	—	—	0.33	黒耀石	
57	R-56-1	7.09	8.30	32.56	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
58	R-56-1	6.86	8.74	32.55	碎片	—	—	—	0.06	黒耀石	
59	R-56-1	6.87	8.83	32.56	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
60	R-56-1	6.87	8.93	32.55	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
61	R-56-1	6.67	9.12	32.57	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
62	R-56-1	7.07	9.47	32.58	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
64	R-56-1	4.85	6.58	32.58	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
65	R-56-1	4.55	6.77	32.58	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
66	R-56-1	4.70	7.22	32.57	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
67	R-56-1	5.00	7.15	32.59	碎片	—	—	—	0.10	黒耀石	
68	R-56-1	5.16	7.06	32.59	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
69	R-56-1	5.25	6.74	32.53	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
70	R-56-1	5.56	7.36	32.57	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
71	R-56-1	5.11	7.88	32.55	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
72	R-56-1	6.05	8.52	32.55	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
73	R-56-1	6.43	9.27	32.53	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
74	R-56-1	6.55	9.16	32.54	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
75	R-56-1	7.20	8.46	32.53	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
76	R-56-1	7.33	8.24	32.52	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
77	R-56-1	7.50	8.83	32.54	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
78	R-56-1	7.45	8.99	32.59	碎片	—	—	—	0.03	黒耀石	
79	R-56-1	7.16	9.97	32.59	碎片	—	—	—	0.12	黒耀石	
80	R-56-1	5.84	7.06	32.53	碎片	—	—	—	0.20	黒耀石	
81	R-56-1	4.78	6.98	32.56	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
82	R-56-1	5.28	7.52	32.49	碎片	—	—	—	0.23	黒耀石	
83	R-56-1	5.94	7.95	32.46	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
84	R-56-1	6.72	8.14	32.49	碎片	—	—	—	0.40	黒耀石	
85	R-56-1	7.30	8.17	32.52	碎片	—	—	—	0.11	黒耀石	
86	R-56-1	7.84	8.60	32.52	碎片	—	—	—	0.29	黒耀石	
88	R-56-1	5.31	7.37	32.44	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
89	R-56-1	5.11	7.52	32.45	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
90	R-56-1	6.83	8.07	32.42	碎片	—	—	—	0.20	黒耀石	
90	R-56-1	6.83	8.07	32.42	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	
90	R-56-1	6.83	8.07	32.42	碎片	—	—	—	0.02	黒耀石	

石器集中2

番号	グリッド	北-南[m]	西-東[m]	標高[m]	器 種	長さ[m]	幅[m]	厚さ[m]	重量[g]	石 質	備 考
1	Q-55-9	74	9.42	32.40	碎片	—	—	—	0.88	メノウ	
2	Q-55-9	68	9.12	32.30	剝片	2.55	1.10	—	0.90	頁岩	
3	Q-55-9	88	8.38	32.43	碎片	—	—	—	0.08	黒耀石	
4	Q-55-9	65	8.09	32.42	剝片	2.25	2.65	—	2.86	黒耀石	

番号	グリッド	北-南(m)	西-東(m)	標高(m)	器 種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石 質	備 考
5	Q-55-9	9.92	9.53	32.37	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
6	Q-55-9	9.87	9.60	32.35	碎片	—	—	—	0.23	黒耀石	
7	Q-55-9	9.80	9.50	32.34	碎片	—	—	—	0.27	黒耀石	
8	Q-55-9	9.90	9.39	32.34	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
9	Q-55-9	9.95	9.15	32.38	碎片	—	—	—	0.06	黒耀石	
10	Q-55-9	9.60	9.73	32.38	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
11	Q-55-9	9.50	9.69	32.39	剥片	—	—	—	0.78	黒耀石	
11	Q-55-9	9.50	9.69	32.39	碎片	—	—	—	0.05	黒耀石	
12	Q-55-9	9.48	9.40	32.44	ナイフ形石器	2.75	1.70	0.50	1.64	黒耀石	
13	Q-55-9	9.37	9.62	32.39	碎片	—	—	—	0.14	黒耀石	
14	Q-55-9	9.50	9.90	32.34	碎片	—	—	—	0.04	黒耀石	
15	Q-55-9	9.35	9.78	32.44	碎片	—	—	—	0.30	黒耀石	
16	Q-55-9	9.25	9.34	32.37	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
17	Q-55-9	9.08	4.03	32.37	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
18	Q-55-9	38	7.89	32.42	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
19	Q-55-9	40	7.80	32.42	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	
20	Q-55-9	59	7.80	32.42	碎片	—	—	—	0.04	黒耀石	
21	Q-55-9	1.34	7.84	32.44	碎片	—	—	—	0.01	黒耀石	

グリッド出土の石器

番号	グリッド	北-南(m)	西-東(m)	標高(m)	器 種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石 質	備 考
01	Q-55-9-1				ナイフ形石器	3.80	1.20	0.55	1.64	黒耀石	
02	R-56-1-2				ナイフ形石器	3.70	1.20	0.55	1.78	チャート	
03	Q-56-7-1				ナイフ形石器	2.45	0.95	0.30	0.57	黒耀石	
04	M-51-5-1				ナイフ形石器	3.30	1.50	0.60	2.45	粘板岩	
05	M-49-5-1				ナイフ形石器	4.00	1.60	0.45	3.00	チャート	
06	P-54-4				ナイフ形石器	3.75	1.45	0.40	1.87	粘板岩	
07	L-49-8-1				ナイフ形石器	2.20	1.40	0.60	1.63	黒耀石	
08	M-50-6				削器	7.30	2.55	0.90	11.65	チャート	
09	M-50-4-1				削器	4.40	2.00	0.60	4.12	チャート	
010	P-55-2				有茎尖頭器	3.65	1.20	0.35	1.52	粘板岩	
011	L-48-2				尖頭器	1.70	1.60	0.45	0.73	黒耀石	

3 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構

土壇29基が検出されている。土壇はO-54~56・P-55~57・Q-56・57グリッドに集中しており、土壇からの出土遺物は縄文時代後期前葉の土器に限られている。後述のA~Dについては出土遺物、形態、覆土等から縄文時代後期の所産と考えるのが妥当と思われる。E~Fについては明確な出土遺物に乏しく縄文時代の所産ではない可能性も残しているが、O-54~56・P-55~57・Q-56・57グリッドの土壇集中部に位置するので他時期として別にすることはしなかった。以下、形態毎に分布状況、出土遺物等の記述を行う。規模については表を参照願いたい。

A 平面が円形ないしは不整の円形をしており、断面の形態が鍋のような形になるもの。第1号土壇、第3号土壇、第10~12号土壇、第15号土壇、第32~35号土壇がこれにあたる。Q-56グリッド(第1号土壇、第3号土壇)、P-55グリッド(第10~12号土壇、第15号土壇)、Q-57-1グリッド近辺(第32~35号土壇)にまとまって分布している。第1号土壇からは第376図1~4の他、無文の小片が出土している。堀之内式期であろう。第15号土壇、第35号土壇からも縄文時代後期の土器の小片が出土している。第3号土壇、第10~12号土壇、第32~34号土壇は出土遺物がなかった。

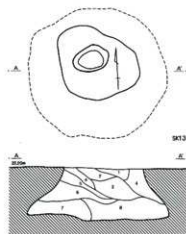
B 平面が円形でAと似るが深度のあるもの。第7号土壇、第25号土壇、第31号土壇、第37号土壇がこれにあたる。特に分布の傾向は見いだせない。第37号土壇は柱穴とも見られたが周辺には他の柱穴が認められなかった。第25号土壇からは第376図17・18の他、無文の小片が20片ほど出土している。第37号土壇からは第376図21が出土している。第7号土壇、第31号土壇は遺物が出土していない。

C 平面が円形で深度があり、確認面と底面との間に段や稜線をもつもの。ないしは底面に小ピットをもつもの。特に分布の傾向は見いだせない。第4号土壇、第6号土壇、第24号土壇、第29号土壇、第30号土壇、第36号土壇がこれにあたる。第24号土壇は確認面と底面の間に稜線を持つもので、途中ですぼまる断面形態である。第24号土壇からは第376図8~16が出土している。堀之内式期の所産と考えられる。第29号土壇からは縄文時代後期土器の小片が若干出土しているが図化し得るものはなかった。第30号土壇からは第376図19・20の他、20片ほど縄文時代後期の土器が出土している。第4号土壇、第6号土壇、第36号土壇からは遺物が出土していない。

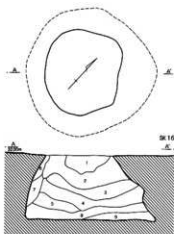
D 平面が円形で、断面形がいわゆるフラスコ状のもの。第13号土壇、第14号土壇、第16号土壇がこれにあたる。Q-55-1グリッド周辺に3基がまとまっている。第13号土壇、第14号土壇は上部が攪乱により削平を受けている。底面にピットが見られる。第13号土壇からは第376図5・6が出土している。堀之内式期の土壇と考えられる。第14号土壇からは遺物が出土していない。第16号土壇からは第376図7のほか縄文時代後期の土器小片が若干出土している。

E 平面が不整形で、掘込みは浅く、断面形が皿の様な形のもの。第2号土壇、第8号土壇、第9号土壇がこれにあたる。いずれの土壇からも遺物は出土していない。

F 第26~28号土壇は細長い平面形のもので、底面は平らである。P-56-1グリッド近辺にまとまっている。第26号土壇から縄文時代後期の土器小片が若干出土しているが、第27号土壇、第28号土壇からの出土遺物はなかった。

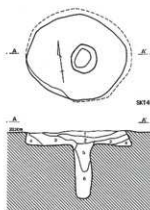


- 1 暗褐色土 ローム細粒を含む
- 2 黒褐色土 ローム細粒を含む
- 3 暗褐色土 ローム細粒を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 6 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む
- 8 黒色土 ローム粒子を少量含む

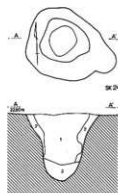


- 1 暗褐色土 ロームを多く含む
- 2 暗褐色土 ロームを多く含む
- 3 暗褐色土 ロームを含む
- 4 暗褐色土 ロームを少量含む
- 5 黒褐色土 ロームを少量含む
- 6 暗褐色土 4よりやや明るい色調を呈する
- 7 暗褐色土 暗褐色土を含む
- 8 黒褐色土 ロームを含む
- 9 暗褐色土

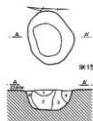
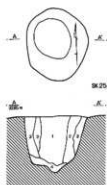
- 1 暗褐色土 2より暗い色調
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 3 明褐色土 ローム粒子を少量含む
- 4 明褐色土 硬質



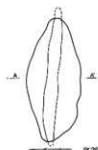
- 1 黒褐色土 ローム細粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム細粒を含む
- 3 黄褐色土 黒色土のブロックを含む
- 4 黄褐色土 ロームを多量に含む
- 5 黒褐色土 ローム細粒を含む
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む



- 1 暗褐色土 ローム粒子をごく少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子をごく少量含む
- 3 褐色土 1より明るい色調、硬質



- 1 暗褐色土 ロームブロックを少量含む
- 2 暗褐色土 ロームを含まない
- 3 黒褐色土 ロームを含まない
- 4 黒褐色土 ローム細粒を含む



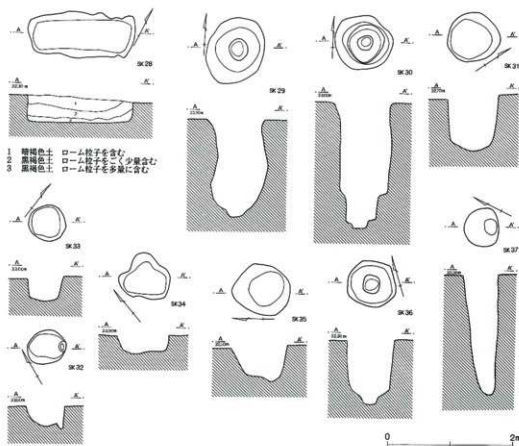
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 2 褐色土 暗褐色土を含む
- 3 暗褐色土 1よりやや明るい色調
- 4 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 6 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 7 褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
- 8 暗褐色土 ローム粒子を含む



- 1 褐色土 ローム粒子をごく少量含む
- 2 暗褐色土 褐色土のブロックを含む

0 2m

第374図 縄文時代の土壌（2）



第375図 縄文時代の土壌 (3)

第85表 縄文時代土壌一覧

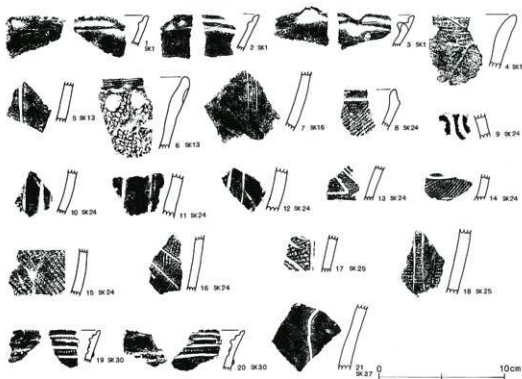
番号	図番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	グリッド
SK 1	373	1.3	1.2	0.4	Q-56-8
SK 2	373	0.9	0.9	0.2	Q-56-8
SK 3	373	1.1	1	0.6	Q-56-9
SK 4	373	0.9	—	1.4	Q-56-9
SK 6	373	1.1	—	2.2	Q-56-2
SK 7	373	0.8	0.7	1	Q-56-2
SK 8	373	1.3	0.9	0.3	Q-55-2
SK 9	373	1	0.8	0.3	P-55-8
SK10	373	1.2	—	0.4	P-55-8
SK11	373	0.9	—	0.6	P-55-8
SK12	373	1	—	0.3	P-55-4
SK13	374	1.3	—	0.8	P-55-1
SK14	374	1.6	1.4	1.1	P-55-1
SK15	374	0.9	0.7	0.3	P-55-7
SK16	374	1.4	1.2	1	Q-54-6

番号	図番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	グリッド
SK24	374	1.5	1.1	1.1	P-56-2
SK25	374	1.2	1	0.9	P-56-1
SK26	374	1.9	0.8	1.2	P-56-1
SK27	374	1.9	0.4	0.5	P-56-1
SK28	375	1.7	0.7	0.4	O-55-9
SK29	375	1.1	0.9	1.6	P-57-7
SK30	375	0.9	—	2	P-57-7
SK31	375	0.8	—	0.9	Q-57-1
SK32	375	0.6	0.5	0.3	Q-57-1
SK33	375	0.6	—	0.4	Q-57-1
SK34	375	0.8	0.7	0.3	P-57-7
SK35	375	0.9	0.8	0.6	P-56-6
SK36	375	0.8	0.7	1	O-55-4
SK37	375	0.6	0.5	1.9	P-55-3

土壌出土遺物（第376図）

いずれも縄文時代後期前葉の堀之内式土器である。

第376図1～3は浅鉢形土器の口縁部破片である。同一個体である。口縁部内面に沈線文を施している。沈線文の途切れる部分で口唇部を内側に折り、屈曲させている。堀之内2式であろう。4は深鉢形土器の口縁部破片である。5は沈線文を施した深鉢形土器の胴部の破片である。6は地文を縄文とした深鉢形土器の口縁部である。円文が巡らされている。堀之内1式である。7は細沈線文を施した深鉢形土器の胴部破片である。8は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部に沈線文を巡らせている。地文に縄文を施している。堀之内1式である。9は深鉢形土器の胴部破片である。曲線的な沈線文が見られる。10～12は深鉢形土器の胴部破片である。沈線文が施されている。13はいわゆる朝顔形の深鉢形土器の胴部破片である。三角形の区画文が施されている。堀之内2式である。14も胴部の破片で沈線文間に縄文が施されている。15は地文縄文が施された深鉢形土器の胴部破片である。16～18は地文縄文上に沈線文が施されている。堀之内1式である。19・20は深鉢形土器の口縁部破片である。刺突を施した隆帯を巡らせている。内面は沈線文を巡らせており、沈線間に点文を施している。堀之内2式である。21は深鉢形土器の胴部破片であり、沈線文が施されている。



第376図 土壌出土土器

グリッド出土の遺物

縄文土器 (第377~378図)

遺構外出土の縄文土器は縄文時代中期後葉の加曾利E式と後期前葉の称名寺式がわずかに見られたが、主体は後期前葉の堀之内式である。発掘区南西部にやや多く見られたが、総量としてはコンテナ1箱に満たない量である。

第377図1は縄文時代中期後葉のキャリパー形の深鉢形土器である。1は加曾利EⅡ式である。第377図2~4は後期前葉の称名寺式である。2は波状部の破片である。3・4は胴部破片で、曲線的な沈線間に縄文を施す。

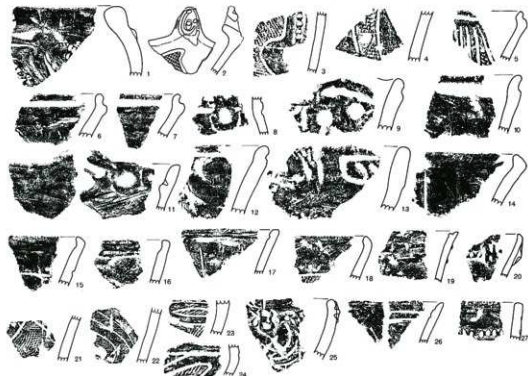
第377図5は地文に縄文を施す土器で、沈線文が施されている。口縁部へと外反気味に移行する形態の深鉢形土器である。第378図1~5も地文縄文を施す胴部の破片である。堀之内1式である。

第377図6・7は口縁部に1条沈線を施す深鉢形土器である。括れをもつ形態であろう。堀之内1式である。第377図8はこの種の土器の括れ部の破片である。

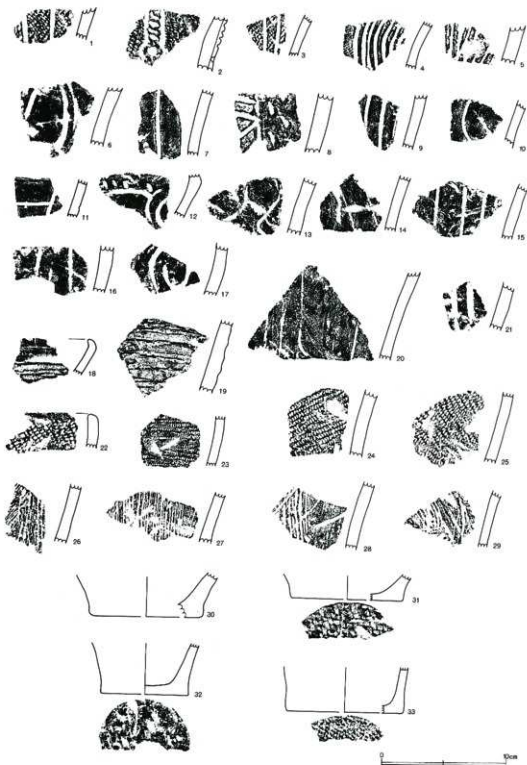
第377図9は深鉢形土器の波状部の破片である。堀之内1式である。

第377図10~17は胴部が弱く張る形態の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけて沈線文により文様が施される。13は鉢形土器かも知れない。10~13は堀之内1式、14~17は堀之内2式であろう。第378図6~17、20、21はこの種の土器の胴部破片である。沈線文により曲線的なモチーフが施されている。

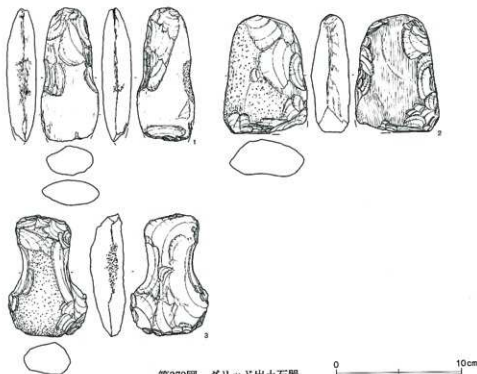
第377図18~20はいわゆる朝顔形の深鉢形土器である。第377図21・22はこの種の土器の胴部破片



第377図 グリッド出土土器(1)



第378図 グリッド出土土器(2)



第379図 グリッド出土石器

である。第377図23・24も同様に沈線間に細かい縄文が施されている。鉢形土器かも知れない。いずれも堀之内2式である。

第377図25は口縁部が内湾する形態の鉢形土器である。堀之内2式である。第377図26は口縁部内面に2条の沈線を巡らせた鉢形土器である。堀之内2式である。第377図27は口縁部がほぼ直立する形態の深鉢形土器である。加曾利B1式であろう。

第378図18、19、22～29は粗製深鉢形土器である。後期前葉の堀之内式であろう。18・19は無文である。器面をなでて調整している。22～25は縄文のみを施した土器である。26～29は細沈線が施される土器である。第378図30～33は底部の破片である。

石器 (第379図)

- 1 磨製石斧：刃部を欠損する。研磨は基端部に剝離面を残すが、刃部付近は入念に施されている。平面形状を見ると、刃部から基端部にかけて幅はあまり変わらない。基部中央部で僅かな挟りを敲打によって作り出している。横断面はレンズ状となり、基部中程は円形に近い。
- 2 磨製石斧：下半分を欠損する。研磨は全面に施されている。横断面径はレンズ状となる。
- 3 打製石斧：平面形状は基端部がコ字、刃部が円形に近い鍵穴状となる。正面の刃部付近に自然面を残しており、刃の角度として利用している。

第86表 出土石器一覧

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
1	N-48-6	磨製石斧	10.52	4.61	2.33	166.64	緑色岩	
2	N-49-1	磨製石斧	9.35	5.95	3.15	308.24	砂岩	
3	N-51-6	打製石斧	9.65	6.30	2.70	168.47	砂岩	

4 その他の遺構

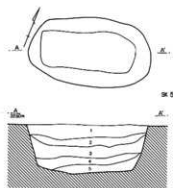
縄文時代以外の遺構として10基の土壇が検出されている。これらの土壇からは出土遺物がなく、時期は不詳である。10基が発掘区全体に散見されるのみであり、グリッド54列以北とR列以西の遺構の分布は近年の溝以外には極めて希薄であるといえよう（第360図）。

第5号土壇、第18号土壇、第38号土壇は平面が楕円形の土壇である。第18号土壇は確認面よりも、底面の長径のほうが長い。第17号土壇、第19号土壇、第20号土壇、第21号土壇、第22号土壇、第23号土壇、第39号土壇は平面が円形ないしは不整形形の土壇である。第39号土壇は深度があるが、他はいずれも浅いものである。

第87表 その他の土壇一覧

番号	図番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	グリッド
SK 5	380	2.0	1.1	0.8	Q-55-8
SK17	380	0.7	0.6	0.2	P-53-3
SK18	381	1.9	0.8	1.6	P-53-2
SK19	380	1.0	0.7	0.3	M-49-2
SK20	381	1.3	1.2	0.3	L-49-8

番号	図番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	グリッド
SK21	381	1.4	1.1	0.3	N-50-9
SK22	381	0.9	0.8	0.4	N-51-4
SK23	381	1.0	—	0.3	N-51-2
SK38	381	1.4	1.1	0.9	M-52-4
SK39	381	0.9	0.6	1.6	M-51-2



- 1 黒褐色土 ローム細粒を僅かに含む
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む
- 3 暗黄褐色土 粘質のロームを多量に含む
- 4 暗褐色土 ロームはやや少ない
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む



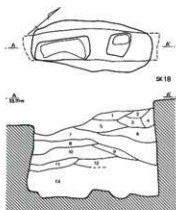
- 1 暗褐色土 ロームを少量含む



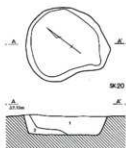
- 1 暗褐色土 ロームを少量含む
- 2 暗褐色土 ロームを微量含む
- 3 暗褐色土 ロームを多く含む

0 1 2m

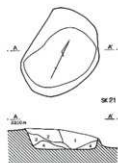
第380図 その他の土壇（1）



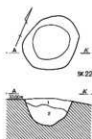
- 1 暗褐色土 ローム細粒を含む
- 2 黒色土 ローム細粒を少量含む
- 3 暗褐色土 ローム細粒を少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量、ローム粒子をやや多く含む
- 6 暗褐色土 5よりやや多くロームブロックを含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む
- 8 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
- 9 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 10 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを極めて多く含む
- 11 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 12 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含む
- 13 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む



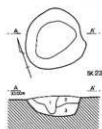
- 1 暗褐色土 ロームを含む
- 2 暗褐色土 ロームを多く含む



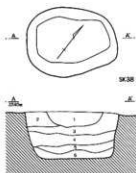
- 1 暗褐色土 ローム粒子をごく少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子をやや多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 ロームブロックを含む



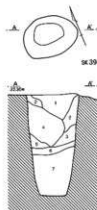
- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む



- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む



- 1 黒色土 ローム細粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ロームを少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子と1cm前後のロームブロック少量含む
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む
- 6 暗褐色土 ロームブロックを少量含む



- 1 暗褐色土 ローム細粒を少量含む
- 2 暗褐色土 ローム細粒を多く含む
- 3 暗褐色土 ローム細粒と5mm前後のロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 ローム細粒とロームブロックを少量含む
- 5 暗褐色土 ローム細粒とロームブロックを多量に含む
- 6 暗褐色土 ローム細粒を少量含む
- 7 黒褐色土 ローム細粒とロームブロックを多量に含む

0 2m

第381図 その他の土壌(2)

5 小 結

先土器時代

丸山台遺跡における先土器時代の遺構及び遺物は、石器集中2か所とグリッド出土のナイフ形石器、削器、有茎尖頭器等である。

石器集中は調査区の南西側、谷中川に面する斜面西側の台地平坦部に2箇所が近接して位置する。石器の内容は黒曜石の微細な碎片が主体で、明確な石器は石器集中2のナイフ形石器1点のみであった。

グリッド出土の石器は石器集中と対称的にナイフ形石器7点、有茎尖頭器1点、尖頭器1点、削器2点と内容は豊かである。出土グリッドによる分布を見ると、調査区に南側P-54～R-56グリッドから01～03・06のナイフ形石器、010の有茎尖頭器が出土し、調査区の北側L-48～M-51グリッドから04・05・07のナイフ形石器、08・09の削器、011の尖頭器が出土している。区画範囲が広いためこの2グループがにわかには言えないが、南側のナイフ形石器01～03は外形が背縁を底辺とした三角形状となり、調整加工は直角に立ち上がり、器厚は厚く、横断面が直角二等辺三角形または盤状となる。この様に形態が近似しており、ともに砂川期より古い様相が窺える。また、北側の07のナイフ形石器は砂川期の第2形態のナイフ形石器で、08・09の縦長剥片を素材に決りの入る削器は同じく砂川期によく見ることができる。04・05のナイフ形石器を同一時期に含めるかの問題は在るが、本地区に砂川期の石器群が分布していることが指摘できる。以上2つの地区の石器について観察したが、概ね南側が古い様相をもち北側との間に時間差が見られるようである。

縄文時代

縄文時代の遺構として29基の土壌が検出された。これらの土壌はO-54～56、P-55～57、Q-56・57グリッドにおいて検出されたものであり、グリッド54列以北とS列以西には縄文時代後期の遺構が及んでいないことが今回の調査で明らかとなった。丸山台遺跡は谷戸川左岸の緩斜面に立地した縄文時代後期の集落跡である。低地に面した斜面部を中心にして集落の占地が計られているため、今回の調査区のような平坦な台地上には遺構が及ばないものと考えられる。丸山台遺跡は土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果から、後期前葉の集落として県内でも代表的な遺跡の一つに数えられる。

土壌のうち、A～Dとしたものは土地区画整理事業の調査区とも共通するものであり、出土石器の時期も後期前葉の堀之内式を中心としたもので共通している。また、縄文時代後期の遺構が及んでいない部分が明らかになったことにより、集落の輪郭がほぼ把握できるようになりつつあると考えられる。土地区画整理事業の成果とあわせて分析することが必要であろう。

IX 結 語

1 先土器時代

1 石器について

東京外環自動車道と光地内遺跡群における先土器時代の遺物は、花ノ木遺跡、柿ノ木坂遺跡、丸山台遺跡の3遺跡から出土している。花ノ木遺跡では3枚の文化層が比較的狭い範囲に重複し、礫群も多数検出されている。柿ノ木坂遺跡は谷を挟んだ樹枝状に伸びる細い台地上に西区と東区に分かれ立地していた。そのため、柿ノ木坂遺跡西区と柿ノ木坂遺跡東区に分け異なる遺跡として報告した。柿ノ木坂遺跡西区では2枚の文化層と礫群数基が検出されている。東区では2枚の文化層が検出され、礫群は狭い範囲に密集していた。丸山台遺跡では黒曜石の碎片の集中が2か所見つかっているが、製品はナイフ形石器の欠損品1点のみで、今回の検討からは外した。

次に、各遺跡の文化層を整理してⅠ～Ⅳ期に分けて説明する。

	Ⅰ期(ソフトローム)	Ⅱ期(ハードローム)	Ⅲ期(ハードローム)	Ⅳ期(黒色帯)
花ノ木遺跡	第1文化層	第2文化層		第3文化層
柿ノ木坂遺跡 西区		第1文化層		第2文化層
柿ノ木坂遺跡 東区		第1文化層	第2文化層	

第Ⅰ期(花ノ木遺跡 第1文化層)

当該期の石器集中は花ノ木遺跡第1・4・9石器集中の3か所である。

石器組成は尖頭器、ナイフ形石器、打製石斧、搔器、削器と削片である。

尖頭器は基部のみの破損品を除いた2点が、いずれも黒曜石の縦長剥片を素材とし、片面加工及び裏面のバルブを除去するための剝離調整が一部施されている。長さは先端部を若干欠損するが推定で7cm前後となり、長幅比は約2.2～2.3である。藤野氏の分類に従うと平面形は中広形木葉形で大きさは中形の2グループの中間といった数値である。形態的には左側縁に一見櫛状剝離風に見える素材の側縁(1)、原石面(2)と主要剝離面の鋭利な辺を有するもので、栗島氏が指摘している様に、櫛状剝離を有する尖頭器と同一視はできない。しかし、本尖頭器と櫛状剝離を有する尖頭器とを時間軸の上で並べると、石器集中1で出土している削片の解釈をいかにするかが問題になる。すなわち2か所の石器集中の間に時間差を設定するのか、櫛状剝離を有する尖頭器と素材縁辺の鋭利な側縁を残す尖頭器が共伴する、または共伴する段階とするかである。いずれにせよ、関東地域で黒曜石製の片面加工尖頭器で7cmは、最も大きなグループに含まれるであろう。

打製石斧の該期出土は例は少なく、中形幅狭厚手で横断面が菱形で刃部は片刃に近い。先土器時代の石斧で、本例に若干近似するものは橋本遺跡Ⅲ文化層に見られる程度で、むしろ縄文時代草

創期の石斧の例に近い。

本尖頭器と打製石斧と削片をいかに捉えられるかは、関東地域の男女倉型尖頭器を検討するなかで、重要な課題になると思われる。

第II期（花ノ木遺跡 第2文化層、柿ノ木坂遺跡西区 第1文化層、東区 第1文化層）

当該期の石器集中は花ノ木遺跡第2・3・5～7・10・12～14、柿ノ木坂遺跡西区第1・6～9・11・14・15、東区 第1～3・6～8・14の総計24か所である。

石器集中の数は多いが、各遺跡によって石器群の様相は異なっている。花ノ木遺跡はナイフ形石器2点と削器2点のみで、グリッド出土のナイフ形石器・角錐状石器を加えても決して豊かな内容ではない。また、柿ノ木坂遺跡東区は切出状のナイフ形石器と、多様な削器が出土しているが、花ノ木遺跡同様基準的資料には成りにくい。ここでは、資料的に最も充実している柿ノ木坂遺跡西区第1文化層の、石器群を検討することにする。

ナイフ形石器は13点（単独3点を含めて）出土している。形態は小形二側縁加工のものが多く、一見砂川期かそれ以降のナイフ形石器にも思えるが、砂川期第2形態のナイフ形石器は見られず、背縁の調整加工が基端から先端まで一律で、剝離は直角に近く、横断面が直角二等辺三角形になる点は、第VI層のナイフ形石器を彷彿させる。また、石器集中9から出土している削片素材の石核2点など、武蔵野台地第IV層下部の石器群と共通する部分が多く、武蔵野台地第IV層下部に位置付けられるものと考えられる。この段階の石器群に対し、切出形石器と基部調整ナイフ形石器が主体を成し、二側縁加工がほとんど見られないとする考えと、存在することに注目する考えがある。この2者の考えを踏まえ、二側縁加工のナイフ形石器の評価に注目すると、大宮台地の提灯木山遺跡第2文化層出土の小形二側縁加工のナイフ形石器、武蔵野台地の花沢東遺跡第3・4文化層の小形ナイフ形石器等に共通する様相も見られる。器種組成で角錐状石器・円形搔器が欠落する点など本石器群の位置付けに不安も残るが、あえて武蔵野台地第IV層下部のナイフ形石器と考えておくことにした。

第III期（柿ノ木坂遺跡東区 第2文化層）

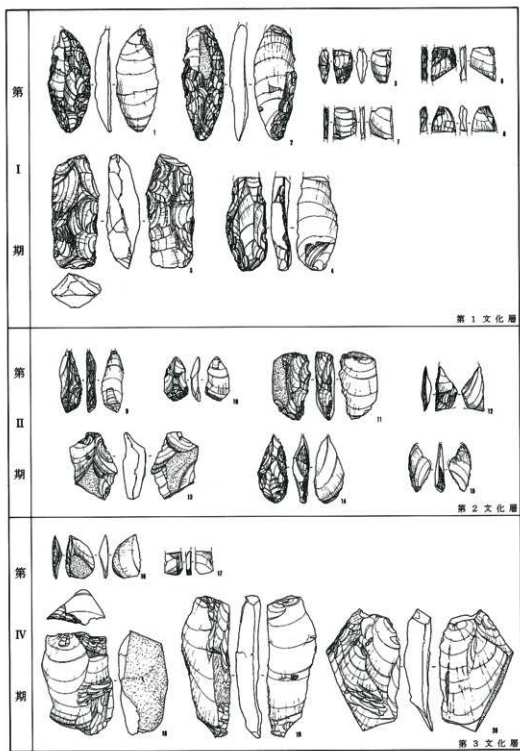
石器集中は柿ノ木坂遺跡東区 第4・5・9～13の7か所である。

出土石器は総数69点でナイフ形石器1点と後は削片類である。ナイフ形石器は透明度の高い黒曜石製で、正面の剝離面と主要剝離面の剝離方向が共通しており、単設打面の石核から連続的に剝離された縦長削片を素材にしたことが伺える。調整加工は基端部周辺及び先端部に施され、服部氏が第I a類1型としたナイフ形石器の範疇に含まれるものと思われる。

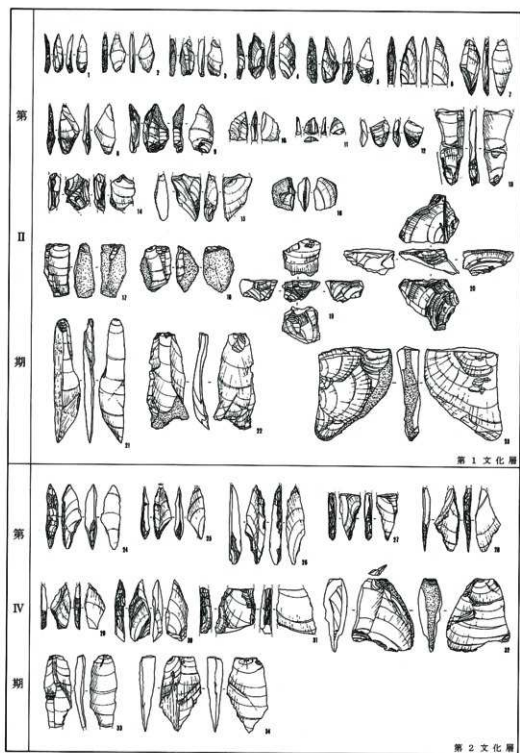
また、メノウ製の大形縦長削片が単独で出土しているが、同一時期の帰属するものか興味深い。石器群は武蔵野台地第VI層に相当すると考えられる。

第IV期（花ノ木遺跡 第3文化層、柿ノ木坂遺跡西区 第2文化層）

当該期の石器集中は花ノ木遺跡第8・11、柿ノ木坂遺跡西区第2～5・10・12・13・16～21の総数

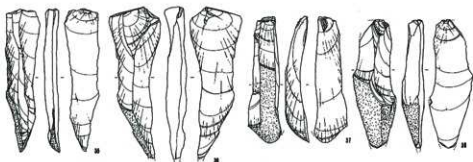


第382圖 花ノ木遺跡

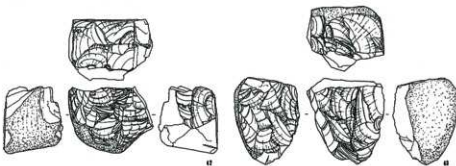
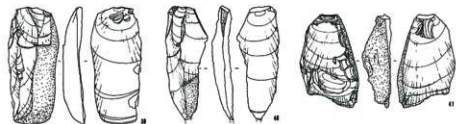


第383図 柿ノ木板遺跡西区(1)

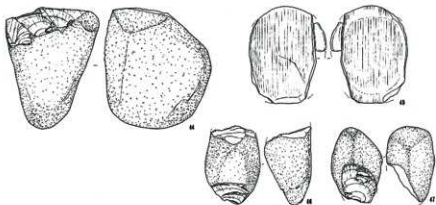
第



IV

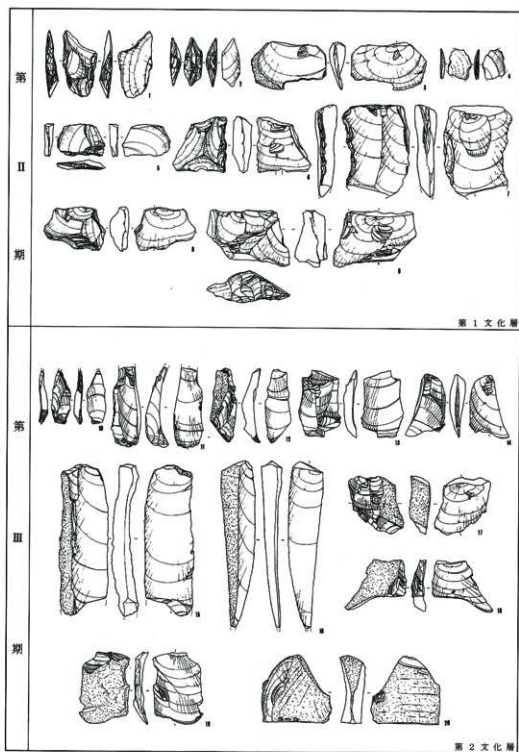


期



第 2 文化層

第384図 柿ノ木坂遺跡西区(2)



第385図 柿ノ木坂遺跡東区

13か所である。

花ノ木遺跡第3文化層からは、ナイフ形石器1点と削器1点以外は、石核と縦長剥片類のみと資料的制約が大きいため、より、資料の豊富な柿ノ木坂遺跡西区第2文化層に絞って検討することとした。

柿ノ木坂遺跡西区第2文化層の石器集中は、南からグループa・b・cの3グループに分けることができた。内グループaとグループcからナイフ形石器がそれぞれ数点出土している。

ナイフ形石器(1~4)は基端部が尖る特徴的な形態をしており、須藤氏の第III B類、小菅氏のI-c類と分類されている。まず形態的特徴を整理すると、背縁が直線的(1・2・4)で側刃縁が内湾し基端部が尖り難のように見える(1~4)、刃縁は逆に僅かに外湾する(1~3)ことがある。調整加工は背縁に基端から先端まで一律の急角度の剥離が施され(1・4?)、1では一部対向剥離が見られる。1が典型的であるとする、2・3は変容が見られるが一定の範疇で捉えらる。大きさは長さ3.4~5.3cm、幅1.2~1.5cm、厚さ0.6~0.9cmと中形の一群である。

本ナイフ形石器の類例としては、東京都成増との山遺跡第4文化層の第IX層を初見の例として、他に埼玉県松木遺跡第12A区第1下部ユニット、千葉県聖人塚遺跡第15ブロック、同北海道遺跡第3文化層、群馬県後田遺跡、神奈川県橋本遺跡第IV文化層、静岡県初音ヶ原A遺跡第3地点第1文化層など広い範囲の遺跡が挙げられる。石器の出土層位は武蔵野台地第VII層から第VI層下部に対比される場合が多い。

2 石器集中・礫群の分布

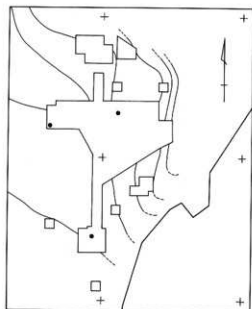
花ノ木遺跡(第386図)

第I期(第1文化層) 石器集中3つが散漫に分布している。第II期の石器集中の分布を基準に見ると、調査区の中央部から南西側、谷を対し外側のラインで囲む傾向がある。しかし、集中の数が少なく細かい点は不明である。

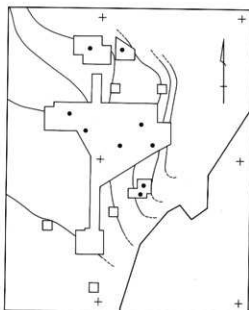
第II期(第2文化層) 石器集中は9か所と最も多い。集中は幾つかのグループを形成し、第I期の分布よりも谷を小さく囲むようである。礫群の分布と共通する部分が多く、南東及び北側の少し離れて設定された調査区では、石器集中と礫群の対応関係が見られる。

第IV期(第3文化層) 等高線に直角に2つの石器集中が並ぶ。調査区全面を最下底部まで掘り下げていないため、分布の拡がりを完全に把握するには限界があった。しかし、南北ラインの深堀区からは遺物が一切検出されていない。調査区の西側の若干低く成る部分、つまり谷を囲むラインでは最も内側に位置しており、第IV期→第II期→第I期と谷を囲むラインの外側に拡がっていく傾向が見られる。

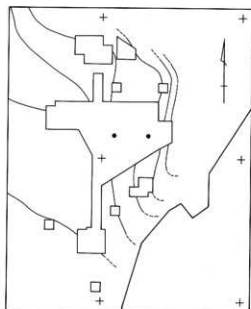
礫群 22基検出されている。幾つかの礫群がまとまって、グループを形成している。分布の概略は谷を2重に取り囲む様になっており、第II期の礫群の分布と共通する部分は大きい。しかし、一部の礫群は第I期の石器集中と緊密な関連が見られる。縄属時期は多くが第II期で一部第I期に伴うものと考えられる。



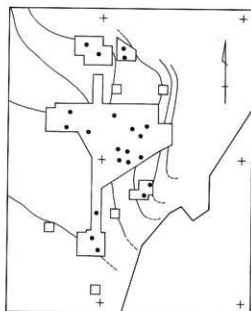
第 I 期 (第 1 文化層)



第 II 期 (第 2 文化層)

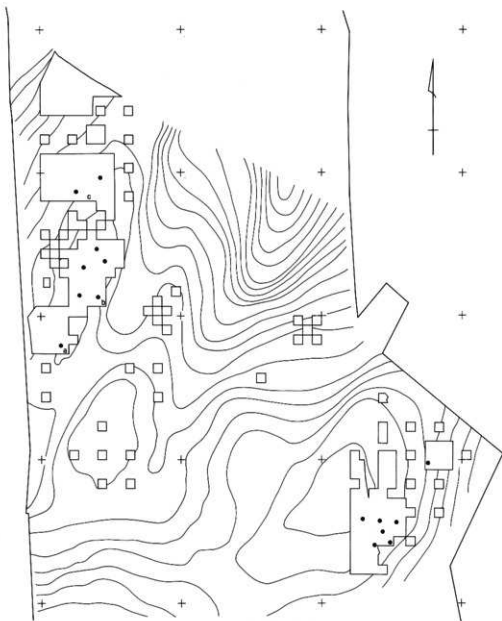


第 IV 期 (第 4 文化層)



雑群分布図

第386図 花ノ木遺跡石器集中・雑群分布図



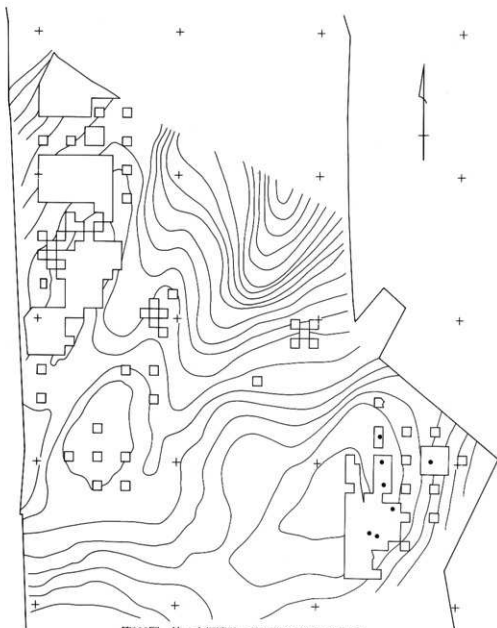
第387図 柿ノ木板遺跡・第Ⅱ期石器集中分布図

柿ノ木板遺跡（第387～390図）

第Ⅱ期（西区第1文化層・東区第1文化層）

石器集中は西区で8か所、東区で7か所の合計14か所である。本期は石器の項目でも述べたように、必ずしも同一時期に取まるとは思わないが、大枠として捉えておく。

西区は覆せた樹枝状台地の標高が最も高い部分に沿って南北に分布する。集中は便宜的に幾つかのグループ分けて、南からグループa（1か所）、グループb（5か所）、グループc（2か所）と呼称した。石器点数及び内容ともグループbが中心で、その南北両側に小グループが位置してい



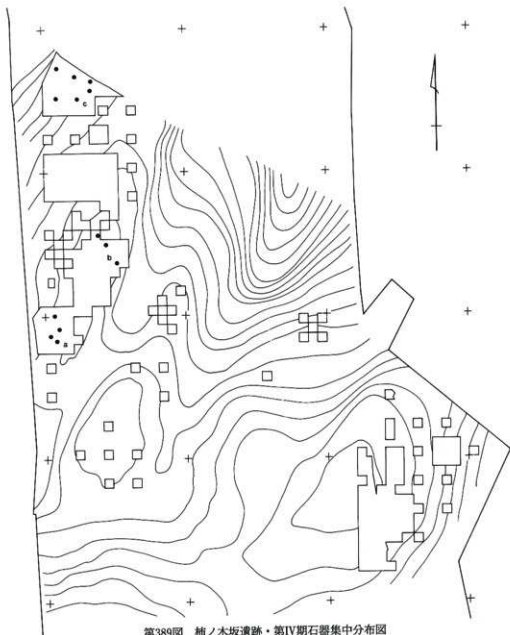
第388図 柿ノ木坂遺跡・第Ⅲ期石器集中分布図

る。単独は6点出土している。

東区は谷を挟んで東側に伸びる樹脂状台地の付け根付近の標高が最も高い部分の南東部に、礫群と重複して6か所が密集している。北東側に1か所だけ離れて存在する集中は、第Ⅲ期の集中と平面的に近接するが、発掘の際にかなりの深度差をあり、明確に分離されている。単独は3点出土している。

第Ⅲ期（東区第2文化層）

石器集中は東区のみで7か所検出されている。第1文化層が標高の最も高い部分の南東部に密集

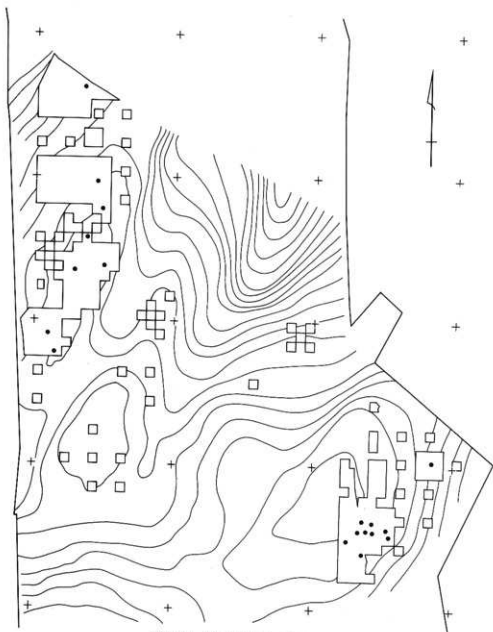


第389図 榑ノ木坂遺跡・第IV期石器集中分布図

するのに対し、第2文化層は一部重複する区画があるが、北東側の台地先端部に拡がる傾向が見られる。単独は4点出土している。

第IV期（西区第2文化層）

石器集中は西区のみで、13か所検出されている。分布は第II期同様に樹枝状台地の標高の最も高いラインに沿って並び、台地の先端まで拡がる。集中は幾つかのグループを形成しており、便宜的に南からグループa（4か所）、グループb（3か所）、グループc（6か所）とに分けた。石器点数及び内容はグループaとbが中心を成し、中間のグループbは小規模の石器集中で、第II期の集



第390図 柿ノ木坂遺跡・礫群分布図

中の中心を南北両側で挟む形に成っている。単独は5点出土している。

礫群

礫群は西区8基と東区10基を合わせて18基が検出されている。西区は南北に広い範囲に散漫に分布し、石器集中同様、幾つかの礫群が南から北に3つのグループを形成している。帰属時期は第II期に伴うものが多いが、南及び北側部のグループは第IV期に伴う可能性が高い。東区は密集区に9基がまとまり、第II期の石器集中と重複関係が見られ、当該時期に伴う可能性が高い。北東部に1

基だけ離れて存在する礫群は、他の礫群との間に接合関係も見られず、第Ⅲ期の石器集中に伴う可能性もある。

3 石器集中の規模

石器集中を検討するに当たり、点数と器種組成を便宜的に以下のような基準をもうける。点数は

- (a) 30点未満
- (b) 30>100点未満
- (c) 100点以上の3段階

石器の組成は

- (1) 製品 (Tool)
- (2) 製品 (Tool) + 剥片
- (3) 製品 (Tool) + 剥片 + 碎片
- (4) 製品 (Tool) + 碎片
- (5) 剥片 + 碎片
- (6) 剥片
- (7) 碎片

以上、7パターンを想定し、分布の範囲は長軸と短軸から面積に換算した。

花ノ木遺跡

石器集中を下記の表に示す。

集 中	点数	組成	面積(m ²)
第1文化層			
1	c	3	30
4	a	2	9
9	a	3	
第2文化層			
2	a	5	
3	a	2	
5	b	5	20
6	a	5	
7	a	5	7.5
10	b	5	10
12	a	5	4.5
13	a	2	10
14	a	5	4
第3文化層			
9	a	6	
10	a	3	12.5

第1文化層では石器集中1が遺物点数が非常に多く、数量的には碎片を主体に製品、剥片と多様な内容であるのに対し、石器集中4・9は小規模で製品を含んでいる。

第2文化層は石器集中5・10の規模及び点数が大きい。しかし、規格的な製品を含まず、ナイフ

形石器等はむしろ、点数の少ない石器集中3・13から出土している。

第3文化層はいずれも小規模の石器集中で、器種組成は石核と縦長剥片から成っている。

柿ノ木坂遺跡西区

西区は21か所の石器集中が2枚の文化層から検出されている。内容を下記の表に示す。

集 中	点数	組成	面積(m ²)
第1文化層			
1	a	5	5
6	b	3	18
7	c	5	5
8	a	5	4
9	b	5	6
11	a	1	0.5
14	c	3	16
15	a	2	1.5
第2文化層			
2	a	5	
3	a	4	
4	a	5	4
5	b	3	7.5
10	a	3	12
12	a	6	
13	a	2	
16	b	3	24.5
17	a	3	7.5
18	a	5	1
19	a	5	12
20	a	5	1.5
21	a	3	2

第1文化層は石器集中6・7・14の出土点数が多く主体を成している。石器集中6と7が眼鏡状に連結し、石器集中6にナイフ形石器、大形の剥片が含まれるのに対し石器集中7は砕片が主体と対照的な在り方をしている。製品の多くは石器集中14から出土している。

第2文化層は小規模の石器集中が3つのグループに分かれ分布している。グループaは石器集中5、グループcは石器集中16を中心としその周辺に分布し、ナイフ形石器等の製品を含んでいる。

柿ノ木坂遺跡東区

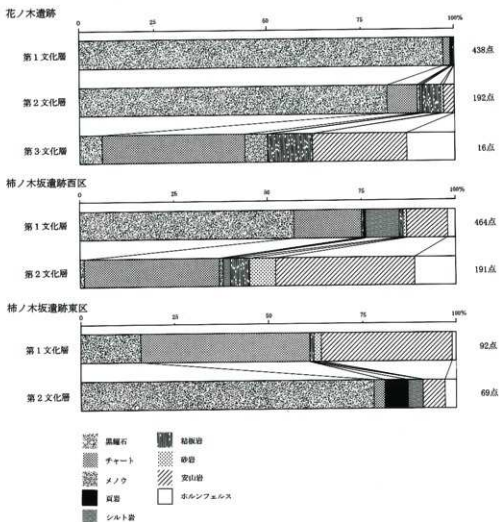
東区は礫群を中心とした遺跡で、石器集中の規模は全体小さい。

集 中	点数	組成	面積(m ²)
第1文化層			
1	a	2	4
2	a	5	
3	a	5	
6	a	5	5
7	a	5	2
8	b	3	7

14	a	3	0.3
第2文化層			
4	a	5	2
5	a	5	
9	a	3	
10	a	5	
11	b	5	12
12	a	6	4
13	a	5	15.5

第1文化層は30点を超える集中は、石器集中8のみである。集中の規模は小さく器種組成は剥片を中心としたものが多い。

第2文化層は第1文化層同様30点を超えるのは、石器集中11のみである。集中の規模は第1文化層以上に小さく、剥片数点のまとまりが点在すると言った状況である。



第391図 石器石材グラフ

4 石材について

花ノ木遺跡

花ノ木遺跡は全体に黒耀石の割合が高い。第1文化層は黒耀石が97%を占め、他はチャート、頁岩、粘板岩が僅かに見られる。

第2文化層はやはり黒耀石が82%と多くを占めている。他の石材は点数的には多くないが、チャート、メノウ、頁岩、シルト岩、粘板岩、砂岩、安山岩と多様化する。黒耀石の占める割合が高いのに製品は黒耀石製のナイフ形石器1点のみで、他は粘板岩及びチャートが用いられている。

第3文化層は総点数が第1・2文化層と比べると極端に少ないため一律な比較はできないが、黒耀石がほとんど無く、チャートの38%と安山岩の25%と多い。他にメノウ、粘板岩、ホルンフェルスが見られ、点数が少ない割に多様である。

柿ノ木坂遺跡西区

第1文化層は黒耀石が57%と最も多くを占め、チャートが18%、安山岩が11%、シルト岩が9%と続き、他はメノウ、頁岩、粘板岩、砂岩、ホルンフェルスが見られる。シルト岩43点はグリッド出土の石器も含めてほとんどが同一母岩である。ナイフ形石器は黒耀石とシルト岩と安山岩が用いられている。削器はチャートと黒耀石が見られる。

第2文化層はチャートが36%、安山岩が37%と全体の7割を占め、黒耀石は非常に少ない。他の石材はメノウ、シルト岩、粘板岩、砂岩、ホルンフェルスが見られ石材は多様である。ナイフ形石器は粘板岩、チャート、ホルンフェルス、削器はチャート、安山岩、大形の縦長剥片は安山岩、ホルンフェルス等が用いられ、石核はチャート、安山岩、礫器は砂岩、敲石は安山岩、磨石は砂岩が多く使われている。

柿ノ木坂遺跡東区

第1文化層はチャートが45%、安山岩35%、黒耀石16%で全体の9割以上を占め、他に粘板岩、砂岩、ホルンフェルスが見られる。ナイフ形石器は安山岩とチャート、削器は黒耀石とチャートが用いられている。

第2文化層は黒耀石が78%占めている。他はチャート、頁岩、シルト岩、安山岩、ホルンフェルスと点数は少ないが多様である。ナイフ形石器は透明度の高い黒耀石を用いている。メノウの大形縦長剥片が1点単独で出土している。

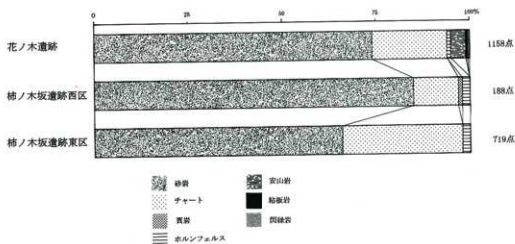
次に産地推定について若干触れておく。

黒耀石

蛍光X線分析と昌子形態による産地推定の結果によると、花ノ木遺跡の第1文化層はグループI～IIIは見られず、霧ヶ峰グループの可能性が高い。第2文化層はグループIV～IXが見られ、八ヶ岳・霧ヶ峰グループの両方が混在する可能性が高い。

柿ノ木坂遺跡西区の第1文化層はグループI～IXの全体に分布しているが、特にグループI～IIIに多い。伊豆・信州の両地域の黒耀石が用いられていた可能性が高い。

柿ノ木坂遺跡東区の第2文化層はグループIV～VIIが多く信州地域の黒耀石が用いられていた可能



第392図 礫石材グラフ

性が高い。

安山岩

柿ノ木坂遺跡(西区・東区)出土の緻密黒色安山岩8点を、蛍光X線分析によって産地推定を行った。それによると7点が利根川(武尊山周辺)、1点が箱根(白銀山周辺)という結果を得た。

箱根とされた石器は西区の第2文化層の5点の内の1点である。この文化層は黒耀石の占める割合が低く、黒耀石の産地推定を行ったのは1点であるため、安山岩と黒耀石の石材の入手の比較はできなかった。

5 礫群について

a) 礫群の規模を重量で比較すると、花ノ木遺跡の22基の礫群は総重量が75,810gで平均は3,445g。柿ノ木坂遺跡西区の8基の礫群は総重量16,702gで平均は2,088g。東区の10基の礫群は総重量52,586gで平均は5,254gである。重量の平均を見ても、柿ノ木坂遺跡東区の礫群が最も規模が大きく、西区の約2倍の重量で、花ノ木遺跡は柿ノ木坂遺跡西区と東区の間である。

b) 礫群の使用された石材をグラフにすると、3遺跡とも砂岩が主体を占め、チャートがそれに続く。各石材の比率は、花ノ木遺跡は約75%が砂岩、20%チャートで他に安山岩等多様な石材が用いられている。一方、柿ノ木坂遺跡西区は点数が少なく直接の対比は難しいが、砂岩が約80%を占め他にチャート、頁岩、ホルンフェルスが少量含まれる。東区は砂岩の割合が約70%と少し減り、チャートが30%近くを占めている。他の石材はホルンフェルスが見られるが、組成は単純である。

(西井幸雄)

参考文献

- 田中英司 1979 「武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古 第7号』神奈川考古同人会
- 金山喜昭 1984 『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 小林恵子他 1984 『花沢東遺跡—都営国分寺南町三丁目団地建設に伴う調査—』恋ヶ窪遺跡調査会
- 橋本勝雄 1985 『八千代市北海道遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告Ⅱ—』千葉県文化財センター
- 田村 隆 1986 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅳ—元割・聖人塚・中山新田Ⅰ—』千葉県文化財センター
- 須藤隆司 1986 『群馬県藪塚遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的考察—』『明治大学考古学博物館 館報№2』明治大学考古学博物館
- 中村誠二 1987 『馬場北遺跡（第6次）北宿遺跡（第10次）松木北遺跡（第3次）松木遺跡（第5次）』浦和市教育委員会
- 藤野次史 1989 「日本列島における槍先形尖頭器の出現と発展」『周陽考古学研究所報 第4集』周陽考古学研究所
- 鈴木次郎 1989 「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」『神奈川考古 第25号』神奈川考古同人会
- 奥 義次・織笠 昭 1989 「東への視点と西への視点—三重県東谷C遺跡の尾、男女倉型尖頭器から—」『長野県考古学会誌59・60号』長野県考古学会
- 栗島義明 1989 「槍先形尖頭器の発生と展開—組み合わせ道具としての槍—」『長野県考古学会誌59・60号』長野県考古学会
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍—狩猟具の進歩—』東京大学出版会
- 西井幸雄 1990 『提灯木山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第92集
- 伊藤 健 1991 「ナイフ形石器研究の視座と定点」『東海史学 第26号』東海大学
- 伊藤 健 1991 「ナイフ形石器文化の画期と変容」『物質文化 第54号』物質文化研究会
- 伊藤 健 1991 「ナイフ形石器の変異と変遷」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要 X』東京都埋蔵文化財センター
- 須藤隆司 1991 「ナイフ形石器の型式論（1）」『旧石器考古学 42』旧石器考古学談話会
- 小菅得夫 1991 「ナイフ形石器の変遷」『石器文化研究 3』石器文化研究
- 織笠 昭 1992 「茂呂系ナイフ形石器型式論」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会編
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 服部隆博 1992 「ナイフ形石器の型式学的基礎研究—特に始良Tn火山灰前後のナイフ形石器を対象として—」『考古論叢 神奈河 第1集』神奈川県考古学会
- 藤波啓容他 1992 『成増との山遺跡Ⅱ』板橋区成増との山遺跡調査団
- 鈴木俊中 1992 「初音ヶ原A地点第3地点」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』三島市教育委員会
- 長崎潤一 1993 『東京都練馬区比丘尼橋遺跡B地点調査報告書』比丘尼橋遺跡調査団

2 縄文時代

縄文時代の遺物は5遺跡で認められた。花ノ木遺跡・柿ノ木坂遺跡では早期～後期、向原遺跡・水久保遺跡では中期、丸山台遺跡では中・後期の土器片が出土した。遺構を時期順に列挙すると、花ノ木遺跡では早期の土壇・炉穴2基、柿ノ木坂遺跡で早期の炉穴1基、水久保遺跡で中期の住居跡1軒、花ノ木遺跡で後期中葉の土壇1基が認められた。やや多く検出されたのは柿ノ木坂遺跡、丸山台遺跡の後期前葉の遺構である。ここでは柿ノ木坂・丸山台遺跡の後期前葉の集落について記し、他遺跡との若干の比較を行うことでまとめにかえたい。

柿ノ木坂遺跡の後期前葉の遺構として住居跡3軒、炉跡を伴う柱穴列1棟、土壇32基がある。土壇の出土遺物は少なく、時期認定に不確定な部分もあるが、後期前葉以外の住居跡が皆無であることから見て、大部分が当期の所産であると見られる。地形は概要や小結で述べたので繰り返さないが、西側の隣接地の調査結果（鈴木1994）から見て、後期前葉の集落はこれで完掘したものと考えられる。住居跡と柱穴列は約40mの範囲に分布し、住居跡は入口部がそれぞれ対向する位置関係にある。住居跡、柱穴列の出土土器には多寡があり、堀之内1式の細別に照らして見ても積極的に遺構の同時存在を明言することはできない。したがって住居数が3軒を割ることもあったとは思われるが、およそ単位集団（小林1986）に近い規模の遺構数と考えられる。こうした遺構が繰り返され、設けられることによりいわゆる環状集落の形態をとるようになるのだろうが、地形的な特徴に加え、土壇群が周辺に点在する形態を基本形として継承した場合、後述する上組Ⅱ遺跡の北群、南群のように偏在・重複する住居群を形成するものと見られる。柿ノ木坂遺跡の居住域がほぼ上組Ⅱ遺跡の北群、南群の規模に近いものであることに注目したい。柿ノ木坂遺跡では小地形に立地するためか堀之内1式以後は遺構の形成はない。

図上にはフラスコ状土壇の分布を示した。埼玉県内においてはフラスコ状土壇の出現がおおむね後期前葉にあたるため、先述のような土壇の時期認定の不確定性から免れる利点がある。このフラスコ状土壇には多くの研究があり、これを検討する余裕はないが、その出現は北方から次第に南下することによりもたらされたと考えられている。この点は冬季を越すための貯蔵穴という可能性を示した実験結果（永瀬1979）の傍証となっている。この前提に立ち居住域と貯蔵のための領域を図上で推定しよ



第393図 柿ノ木坂遺跡縄文時代後期前葉の集落

うとしたものである。居住域の周囲に分布しながらも、場所により群集する傾向が丸山台遺跡、上組Ⅱ遺跡で指摘されている（竹石・野中 他1992・黒坂1989）。

丸山台遺跡の今回の調査では29基の土坑が検出された。土坑出土土器は堀之内式であり、グリッド出土土器も含めるとやや堀之内Ⅰ式が多い。当遺跡は隣接する和光市の発掘調査の結果から見て、後期前葉の集落として埼玉県内では代表的な遺跡の一つと言える（竹石・野中他1992・1993）。市調査区からは40軒を超える住居跡と27棟の掘立柱建物址、153基の土坑が検出されており、報告には掘立柱建物址、各種の土坑について詳細な分析がなされている。遺跡は谷戸川に面した台地の斜面部を中心にして立地している。柿ノ木坂遺跡と比べるとかなり広い台地である。地形的にはローム面の標高約32～33mの広い平坦部（事業団調査区を主とする）、平坦部から緩斜面の部分（第394図 市調査区の上半部）、谷戸川に近い台地裾部の斜面部分（第394図 市調査区の下半部）に分けられ、



第394図 丸山台遺跡縄文時代後期の集落

遺構分布はこうした地形の特徴に則して分布する。事業団調査区では土壌のみの散漫な検出状況であった。事業団調査区に沿った平坦部から緩斜面部分では掘立柱建物址のほか、10軒の住居跡が想定されている。後世の擾乱により住居跡の時期、位置関係の把握には困難が伴うことが窺われるが、加曽利B1式期の1軒以外は後期前葉の住居跡として報告されている。空白部を挟んで斜面部分には竪穴住居を中心として遺構が分布している。やや堀之内内2式期の住居が多く認められる。

報告では集落について、竪穴式住居を集落の外帯、掘立柱建物址を含む内帯、そして71号土坑等の領域を集落の中心部として記述、分析がなされている。内帯、外帯、中心部という用語から想起される遺跡として岩手県西田遺跡がある。外から内に向けて住居、掘立柱建物跡、貯蔵穴、墓墳が同心円構造としてつらなっている。丸山台遺跡における内帯、外帯、中心部という用語の真意を汲み取ることができずにいるので誤解があるかもしれないが、野中と夫氏のいう内帯や中心部は事業

団調査区に接しており、少なくとも事業団調査区においては同心円構造をもった集落が延びていないことを明記しておきたい。事業団調査区では土壌が29基検出されたのみであり、これらは遺跡の中心をなすものではなく、むしろ集落＝「ウチ」と「ソト」との境界近くに設けられた遺構と考えている。大形の71号土坑はこれらに隣接する。土坑は貯蔵穴としての機能廃絶後、上部を骨片含む焼土等で満たされていたと言う。獣骨を伴った狩猟儀礼が執行され、儀礼のフィナーレが狩猟の場である「ソト」との境界で行われたのであろうか。こうした解釈は不毛とは知りつつも、71号土坑の検出をもってしてこの周辺を集落の中心と見ることは遺構の分布上、賛同しかねるのである。

丸山台遺跡の立地は東を流れている谷戸川へ向かう斜面



であり、住居の中の一群は低地帯に並行して帯状に直線的に延びていると単純に考えればいいのではなかろうか。重複等による理由から明かでないものもあるが、入口部は低地帯に向かうものが優位である。一方、事業団調査区に隣接、並行する平坦部から緩斜面の遺構集中部には掘立柱建物跡だけではなく、先述のように10軒の住居跡が把握されている。後述する上組II遺跡では低地帯に並行して帯状に直線的に延びている一群の他、別に群をなすグループが報告書において想定されている。丸山台遺跡の場合も上組II遺跡に類する住居跡の配置をとるものと考えているがどうか。

報告者のひとりである竹石健二氏は北東に開く馬蹄形に展開するという可能性を指摘されている。説得力はあるがN地区の南南西へも谷に並行して集落が延びている可能性もあり、住居跡の分布から見てかなり厳しい。また通常、中期的な馬蹄形集落は中央部に土壌が群在する等の特徴があるが丸山台遺跡の場合には遺構の空白地帯が認められる。広場的なスペースだという反論もあるが、ここでは住居群が帯状に偏在する点のほうを強調しておきたい。

柿ノ木坂遺跡や丸山台遺跡の理解を助けるため、河川に並行した帯状の住居群と偏在する他の住居群からなる集落として上組II遺跡について説明したい。遺跡は入間台地に立地する集落跡で多時期の遺構が認められるが、縄文時代後期の集落としては住居跡32軒、小竪穴3基、土壇166基があり、当期の包含層、旧河群が検出されている(黒坂1989)。これらはおおむね堀之内期の所産である。黒坂健二氏は住居跡が3群に分かれる状況を想定されている。報告書の記述にそって住居跡の分布について概観する。「住居跡の分布は西台地に沿うように見えるものの、南と北ではめざす斜面に差が認められ」、「住居跡の密集と空白を考慮すれば、三群に括約できる。」「径35mほどの円形のうちに含まれ、中央の空白をはさみ、対弧のような分布」で古相を示す南群、南群と間隔をおき東斜面に接する北群、「西側斜面を指向した南北に長い西群」が認められるというものである。丸山台遺跡とは異なり、帯状の分布を示す西群からみて一定距離をおいた東側も斜面地となっており、北群、南群の住居跡がこれにかかるが、以東には集落が広がっていない。北群に7軒、南群・西群に各12軒の住居跡が確認されている。集落の西側には小畦川が南北に流れ、小畦川への斜面に西群の住居が分布しており、北へ延びることが予想される。一部旧河道の攻撃面に当たる部分では縄文時代以後の浸食により住居跡が破壊されたものもある。河道の浸食からまぬがれた地点では縄文時代後期の旧河群が検出され、集落下の河群が水場等として利用されていたことが明かとなっている。

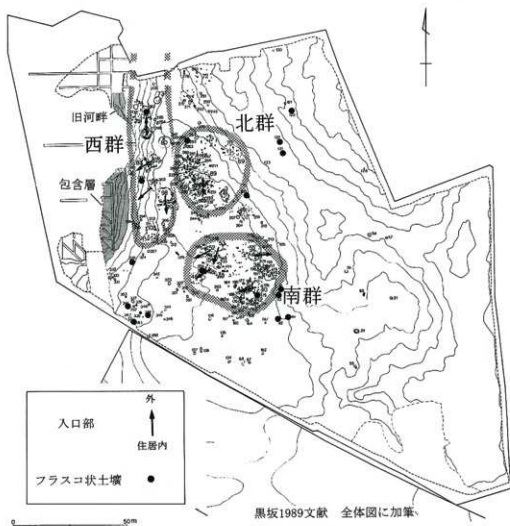
丸山台遺跡、上組II遺跡は現在までのところ、埼玉県下で集落の面的広がりが把握できる調査事例であり、後期前葉の比較的大規模な集落といえる。この2遺跡は斜面地故に集落の最終形として環状構成をとることはなかった。斜面地という立地上、住居の件数が多い割には環状構成をとらない集落のひとつの類型とみなしたい。

このことは後期の集落が中期ないしはそれ以前に確立した環状集落という基本形を継承すると言う考え方(村田1985)に真向から反論するものではない。環状集落の遺跡として港北ニュータウンの小丸(池辺第14)遺跡が知られている。堀之内2式期～加曽利B1式期に住居跡、長方形柱穴列が偏在する傾向が指摘されているものの、集落の最終形態のみを見ると住居跡、長方形柱穴列は環状を呈しており、その内部には土壇群が認められる。(坂上 石井1976・石井1989)。同じく港北ニュー

タウンの神隠丸山遺跡（伊東 坂本1980）では中・後期を主体とする環状集落である。埼玉県下では舌状台地上に立地する大宮市鎌倉公園遺跡が環状集落を構成する可能性があり、方形柱穴列、土壇群はその内部に設けられている（山形他1984）。

集落が最終的に円形、馬蹄形を呈するためには地形的な条件のほか、対向する2つのグループが必要となるといわれている。また中央部が広場等のなんらかの空間として意識されることも条件に加えられている。最近では植物利用等の観点も提示されている（石塚1991）。

環状集落という基本形を継承すると言う考えに反論するものではないと言ったが、遺跡群の中で中心的な集落がどこなのかは地域毎に状況を見定める必要があるだろう。丸山台遺跡や上組II遺跡は現状では当期の大規模な集落と見られるが、それが拠点的地であるかといった位置づけはその後でもよい。こうした遺跡間相互の有機的な関連性を考察するために遺跡のかたちを抽象化した概念としてセトルメント・システム（小林1973）がある。丸山台遺跡、上組II遺跡の様に比較的住居件数



第395図 上組II遺跡縄文時代後期前葉の集落

が多い遺跡にも関わらず環状集落に発達しない様相はパターンAの崩壊と見るのか、広場を持たないパターンBが多数の住居数に発達した形態と見るのか、あるいは地形も考慮にいったセトルメントパターン分類が地域をこえ、中期から後期を貫いて行う前提に時間軸上の動態を軽視しがちな側面があるのか等々、多くの議論があると考えられる。いずれにせよ丸山台遺跡、上組II遺跡に見るような河川に並行した帯状の一群を有する集落跡は中期以来の環状構成を志向する集落とは相違することは明かである。しかしここで述べた問題点を整理することが不可欠と考えており、その解釈は後日に委ねたい。その前提として地域的研究、集落の型式分類、多様な角度からの集落分析が必要なのは言うまでもない。やがて後期中葉になると埼玉県下では高井東遺跡（市川他1974）や赤城遺跡A・E・F区（新屋他1988）に見るように中央の窪地に向かって住居群が分布する集落形態が知られる。後期前葉の集落を論じるには集落形態の指向性がどこへ向かっているのか見定める必要があり、こうした後世の典型的な形態にも注意をはらう必要があろう。

ここでは今回の調査に関連する遺跡の様相についてふれるのみで、集落研究一般や県外の状況に目を向ける余裕はなく、参考文献は省略させていただいた。

（新屋雅明）

引用文献

- 新屋雅明 他 1988 『赤城遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石井 寛 1989 『縄文集落と掘立柱建物跡』『港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 調査研究集録』6
- 石塚和則 1991 『環状集落考』『埼玉考古学論集』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 伊東郭 坂本彰 1980 「横浜市神隠丸山遺跡（ル1・2）の調査」『第4回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 黒坂慎二 1989 『上組II遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小林達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財』112
- 小林達雄 1986 「原始集落」『岩波講座 日本考古学4』
- 坂上克弘 石井寛 1976 「縄文時代後期の長方形柱穴列」『港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 調査研究集録』1
- 城近憲市 他 1974 『高井東遺跡』 埼玉県教育委員会
- 鈴木一郎 1994 『埼玉県和光市柿ノ木坂遺跡』和光市教育委員会
- 竹石健二 野中和夫 他 1992 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅰ』
- 竹石健二 野中和夫 他 1993 『埼玉県和光市丸山台遺跡群Ⅱ』
- 永瀬福男 他 1979 『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会
- 村田文夫 1985 『考古学ライブラリー 縄文集落』 ニューサイエンス社
- 山形洋一 他 1984 『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会

3 花ノ木遺跡出土の弥生土器について

花の木遺跡出土の弥生土器は、中期後葉から後期にわたっており、後期土器が主体となっている。

ところで、南関東の後期弥生土器編年は、1970年代後半以降、「南関東地方」を想定して設定された「久ヶ原式－弥生町式－前野町式」編年案を疑問視する見解が相次ぎ（岡本1979、滝沢他1975など）、その有効性は、今日ほぼ否定されたといつてよいだろう。より細かな地域を単位とする、新たな編年案の再編は順調ではないが、1990年代に入り、ようやく具体化しつつあるようだ（車崎1991a、松本1993aなど）。が、本遺跡が立地する武蔵野台地地域、荒川をはさんで対岸の大宮台地地域など、埼玉県域に属するハケメ台付甕分布圏東端部では、いまだにその作業は進んでいない。このような現状のもと、本遺跡出土土器を報告するにあたっては、①当地域の後期弥生土器編年の見通しとそこにおける位置づけ、②菊川式土器を中心とする外来的影響の整理、を視点の2本柱にすべきと考えた。結局、前者については力およばず、本節の内容は、後者に偏る結果となってしまった。

本書で報告された資料は、断片的な個体が多くを占めるが、これらのうち中期宮ノ台式土器とみられるのは、第1号環濠出土の壺（第97図1・5、第100図1～27）、甕（第99図23・34、第101図19～29）、第2号環濠出土の甕（第102図1）、遺構外出土の壺（第103図2）、甕（同図3）などで、第1号環濠出土の壺（第96図2・3）もその可能性があるだろう。いずれも破片である。ただし、同一個体とみられる第98図1・第99図24～26は、きわだって細頸の形態と、細かな斜格子沈線を縦に区画する肩部文様帯の構成から、静岡県西部の白岩式の影響が認められる。宮ノ台式の分布圏は、現在のところ、ほぼ南関東一円に想定されているが、編年案が得られているのは、東京湾西岸地域など僅かである（石井1980、安藤1990）。武蔵野台地地域についても、筆者自身確たる見通しを持ちえていないが、櫛描文の頻度が低くないこと、第100図7のような、縄文を地文とし、やや複雑な沈線をもつ個体の存在などからみて、もとより一括性は期待できない破片資料群だが、少なくとも後期に接する段階よりは古い傾向がうかがえる。

後期土器の様相は、単純ではない。少なくとも周辺地域の枠内で理解しきれるものでないことは明瞭である。以下、この点に焦点を合わせてみていきたい。

まず注意をひくのは、第1号環濠そして第1号方形周溝墓から出土した櫛描文土器である。東京都区部西部から埼玉県南西部にかけての武蔵野台地縁では、かねてより櫛描文土器の単発的な出土が知られ、東海方面との関連が注意されてきた。すでに本遺跡周辺でも、和光市上之郷遺跡と同市午王山遺跡出土の土器が、谷井彪と高山清司によって報告されている（谷井・高山1968）（註1）。とりわけ上之郷遺跡は、花の木遺跡の北西に接して立地し、今回出土した第1・2号環濠は、その集落に付属する施設と推定される。このことから、かつて報告された資料は、第1号環濠出土土器群とともに再び評価される必要があるだろう（第396図）。

いうまでもなく後期櫛描文は、太平洋沿岸では東海地方（註2）周辺において主体的な装飾技法であり、縄文主体の東京湾周辺の諸地域にあては、非在来的存在である。1980年代以降、東海方面各地域における土器様相の把握が進むにつれ、これら東京湾周辺で出土する櫛描文土器、さらに他の東海系とされる土器の係累を、より限定的に追求する課題が浮上してきた。かかる状況のもと、

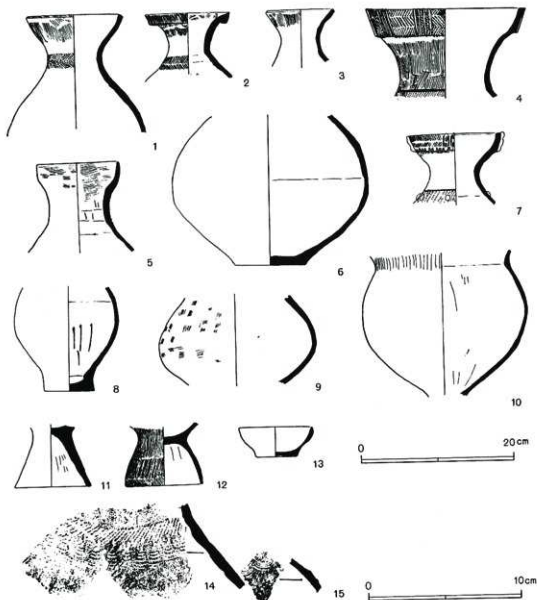
東海各地の研究者の主導で、関東出土の「東海系土器」の総括が試みられたことは、その見通しを提示し、今後の伸展に有効な足がかりを与えたといえるだろう（東海埋蔵文化財研究会1991）。

こうしたなかで明らかになりつつあるのは、静岡県天竜川東岸地域（東遠江地域）の菊川式土器の影響である。本遺跡をはじめ、従来出土の櫛描文土器の多くがそれにかかわるばかりでなく、近年、新宿区下戸塚遺跡などのように、菊川式土器もしくはそれを模倣した土器が、単一遺跡からまともって出土する例が確認されはじめている（車崎1991a・1991b）。一方、菊川式の様式内容は、鈴木敏則、中嶋郁夫らによって明らかにされつつある（鈴木1985、中嶋1981・1985・1988など）。それによれば、菊川式は、かつて「二之宮式」として把握された後期初頭段階を包括した、後期全般を通じて存続する土器様式であり、その様相の推移は、3段階に区分されるという。中嶋はさらに、東海地方東部・甲信・南関東における菊川式土器移動品および模倣品の分布を追求し、模倣品については、模倣の忠実度にもとづきオリジナルとの親疎の差を分析した（中嶋1993）。これらの研究成果を手がかりに、本遺跡出土の後期土器と、菊川式土器の関連について整理していきたい。

櫛描文をもつ壺は、第1号方形周溝墓で1点（第89図2）、第1号環濠で7点（第97図10・11・14、第100図44・46・47・48）出土している。これらのうち第1号方形周溝墓出土の小型壺（第89図2）は、口縁部を欠くが、肩部が張らず、肩部櫛描文帯直下から胴部上半にかけて縄文帯をもつ点で、菊川式の古相をよく示している。すでに中嶋の論考においては、「古段階～中段階」の忠実な模倣品（「模倣パターン①」）で、移動品の可能性もあると評価されている資料である（中嶋1993）。一方、第1号環濠出土の単純口縁壺（第97図10）は、内弯気味の口縁部をもち、中嶋が分類する「広口壺C2」（中嶋1988）に対応する。頸部を欠く壺（同図11）を含め、肩から胴部の張りがやや強く、文様帯は頸部に限られる点で、菊川式の新相を示している。「中段階～新段階」に対応するとみられ、第1号方形周溝墓出土の小型壺（第89図2）に後出する可能性が高い。なお先に触れた上之郷遺跡出土土器のうち、櫛描文をもつ単純口縁壺（第396図1）は、やはり中嶋によって「新段階」の忠実な模倣品あるいは移動品、同じく折返し口縁壺（第396図2）は「成形技法に、調整か、施文技法のいずれか一つを組合わせて模倣する」レベルの模倣品（「模倣パターン⑥」）で、やはり「新段階」に対応する可能性が指摘されている（中嶋1993）。このように、環濠を含む上之郷集落出土の櫛描文土器は、菊川式の相対的に新しい段階に対応するようだ。また、肩部の羽状縄文帯の下端をハケ工具押圧横線で区画する壺（第97図14）は、同図15などとともに駿河湾地域との関連をうかがわせるが、押圧横線を沈線の代用とみなせば、文様構成の基本は在地的といえる。

第1号環濠出土の、脚部下端に段をもち、杯部との接合部に粘土帯をめぐらせる高杯（第98図6）、あるいは直立気味の口縁部にハケメを装飾的に残す鉢または高杯（同図7）は、やはり菊川式にみられる形式的特徴を示している。第98図7は杯部が深いが、それが型式的特徴にあたるかは断定できない。

甕は各遺構においてハケメ甕が主体であるが、底部の基本形態は不明なものが多い。ただし平底甕と確定できる個体はなく、台付甕が過半を占めるとおもわれる。ハケメ台付甕は、きわだった型式変化に乏しく、分布圏内の諸様式において、その組列の把握を困難なものにしている。また、様式間の型式差も顕著とはいえず、文様壺ほどには地域間交流の手がかりを与えてくれない。ところ



第396図 上之郷遺跡出土土器 (谷井・高山1968) (抄録)

で本遺跡出土の壺に特徴的な傾向は、口縁部端の面取りが徹底している点で、例外は僅かである。松本完は、板橋区四葉地区遺跡出土のハケメ壺に菊川式の影響を指摘するにあたり、「口唇部の明瞭な面取り、口唇部外縁のやや下方から加えられた刻目、頸部の括れ具合」(松本1993b、p146)を特筆した。本遺跡にも共通の特徴をもつものが認められる。菊川式土器の実測図を参照する限りでは、ハケメ壺にも、その影響が指摘できるようだ。細部の技法にわたりそれを抽出するのは容易でないが、ハケメ台付壺の地域色と交流の把握は、土器編年とともに当地域にとっての課題である。折返し口縁のハケメ壺(第97図14)も、比率は高くないらしいが、菊川式に含まれる形式である(鈴

木1985)。

以上、花ノ木遺跡と隣接する上之郷遺跡における菊川式の影響について、かいつまむようにみてきたが、それが複数の器類にわたり確認される点は認められるだろう。その評価は、遺跡外部に視野を広げ、他の遺跡を含めておこなう必要があるが、まず、遺跡内部における展開と変遷を整理しておきたい。

弥生時代に属する遺構は、花ノ木遺跡では環濠とみられる2条の弧状溝、その外側に立地する竪穴住居跡群と方形周溝墓群、そして今回の調査の対象地外に展開しているであろう、上之郷遺跡の住居跡群である。これらは遺跡名を異にするが、一体の集落遺跡として理解されるべきことは明らかである。そこで、花ノ木集落を環濠外集落、上之郷集落を環濠内集落と呼び替えて、記述を進めていきたい。中期に属することが確実な遺構は、確認されていない。ただし、かつての報告資料(谷井・高山1968)および環濠覆土中に宮ノ台式土器が含まれていることからみて、環濠内にあたる位置に中期集落が存在した可能性は高い。環濠開削の時期は確定できないが、覆土中層からは菊川式「中段階～新段階」に対応する櫛形土器が出土していること、中期土器の出土がごく従属的であることなど、積極的に中期に遡らせる根拠は得られていない。が、環濠外の方形周溝墓群形成時には存在したと仮定し、後期前半には成立したと考えたい。午王山遺跡の環濠は、不明確ながら中期末に成立した可能性が指摘されており(鈴木1993)、本遺跡の環濠の上限は、至近に立地する両集落の関係を考えるうえで重要な要素だろう。後期の遺構として古く位置づけられるのは、「古段階～中段階」に属する菊川式土器を出土した第1号方形周溝墓である。方形周溝墓群は、断片的な遺構もあるが、周溝の向きをおおむね一致させており、連続的に造営されたとみられる。第1号方形周溝墓以外は遺物に乏しいため、墓域としての時間幅は確定が難しい。また第1号方形周溝墓に対応する環濠内集落は、遺物に限っても確認されていないが、存在の可能性を指摘し、環濠の遺存部分とともに、今後の調査にかかる発見を期待する。それに後続するのは、第1号環濠覆土中に、菊川式「中段階～新段階」類似の土器を含む遺物を残し、また上之郷遺跡報告資料(谷井・高山1968)に含まれる菊川式「新段階」の土器に対応する、おおむね後期後半の環濠内集落である。第1・2号住居跡を含む環濠外集落の出現、いい換えれば環濠外への集落の拡散も、このころに位置づけておきたい。ところで環濠外集落のうち、比較的豊富な遺物が床面上から出土した第1号住居跡では、第1号環濠の場合ほど菊川式の影響が顕著でない。ハケメ甕の一部(第84図1・3・4など)は保留するが、壺(第83図1・6)、高杯(第83図7)などは在地の形式であり、細かな波状口縁をもつナデ仕上げの甕(第84図6・7)は、隣接する東京湾沿岸に主体的に分布しているなど、単純な比較では、第1号環濠出土土器に比べ在来色が目立つようだ。いずれにしても、第1号環濠出土土器より古相は認められず、環濠外集落は、環濠内への土器の廃棄が顕著になり、環濠の埋没が進行する段階、あるいはそれにやや遅れて出現した可能性が高いと考えておきたい。

以上を通観すると、断片的ながら、花ノ木遺跡・上之郷遺跡における東遼江地域の影響の痕跡は、中期後葉白岩式から、おおむね後期菊川式を通じて確認される。白岩式の後を受けて、菊川式の影響が、複数の器類にわたるばかりでなく、一時的なものでない点は注目に値する。

先にも触れたが、近年、菊川式土器の影響が顕著な土器がまとまって出土した集落遺跡が、武蔵

野台地南部で確認されている。好例は、前出の新宿区下戸塚遺跡と、板橋区四葉地区遺跡（板橋区四葉遺跡調査会1988、同1990、松本1993b）であり、これに午王山遺跡、花ノ木遺跡・上之郷遺跡も加えられるだろう。いずれも拠点的な環濠集落である点で共通しており、菊川式系土器が、当地の拠点集落と強い関連をもつ傾向が鮮明になりつつある。その背景には組織的な人の移動が想定されるが、この点はすでに注目されており、中嶋は、菊川様式圏からの移住集落が、中核的集落に接して営まれ、そこを中心に菊川式系土器が拡散したと推定している（中嶋1993、p92）。一方、比田井克仁は、菊川式系土器の移動が、中嶋編年「菊川式中段階」をもって開始される点を強調し、相模湾岸地域に認められる愛知県東部山中式系土器の移動現象と併行する、倭国大乱に関連した移住を想定している（比田井1993）。比田井の説は、考古学的に把握された事象と文献記録の接点をしめし、日本歴史に鈍感になりがちな関東の弥生時代研究にとって刺激のかつ魅力的である。ただし、現時点で「菊川式中段階」における有事を強調しすぎると、それ以前における影響の痕跡を過小評価する危険があるだろう。板橋区四葉地区遺跡でも白岩式土器が確認されており（松本1993b、p146）、東遠江地域の影響が中期に遡る事例は、花ノ木遺跡・上之郷遺跡のみに留まらない。そして、わずかに第1号方形周溝基出土の小型壺に示された菊川式「古段階～中段階」の影響も、今後類例の増加に注意する必要がある。菊川式「中段階～新段階」の影響の顕著化については、中期から後期にわたる両地域の接触の線上において検討を重ねつつ、倭国大乱なり、汎列島の歴史事象との関連を、探究するべきだろう。（石坂俊郎）

註

（註1）「又板橋区志村西台遺跡からは斜線線を有する大形の壺形土器が出土しており、東海地方の伊場式土器あるいはそれに類似するものであり、東海地方から運ばれて来た土器であるとされている。このように出土遺物を見てくると荒川の左岸にある大宮台地の土器は斜線線を有するものは出土していないようで、武蔵野台地では西台遺跡があり、かなり東海地方の土器が入り込んでいるのではなかろうか。」（谷井・高山1968、p52）

この時点で武蔵野台地と大宮台地における傾向の差異を指摘したのは卓見である。なお、午王山遺跡については、昨年調査報告書が刊行され、谷井・高山報告資料についても、新たな実測図が公表されている（鈴木1993）。

（註2）ここでいう「東海地方」とは、加納俊介の定義（加納他1988、加納1991）に従い、天竜川以西のハケメ台付帯地帯を指す。

文献目録

- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分(上)(下)」『古代文化』第42巻6・7号
財団法人古代学協会
- 石井 寛 1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 板橋区四葉遺跡発掘調査会 1988 『四葉地区遺跡 昭和62年度』板橋区四葉地区遺跡発掘調査報告II
- 板橋区四葉遺跡発掘調査会 1990 『四葉地区遺跡 平成元年度』板橋区四葉地区遺跡発掘調査報告III
- 岡本孝之 1979 「久ヶ原・弥生町期文化の諸問題(1)」『異貌』8
- 加納俊介・浅野清春・北村和宏 1988 「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第86号 早稲田大学考古学会

- 加納俊介 1991 「土師器の編年 東海」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版株式会社
- 車崎正彦 1991 a 「東京都における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』I 発表要旨・追加資料篇 東海埋蔵文化財研究会
- 車崎正彦 1991 b 「東京都・下戸塚遺跡」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民族博物館
- 鈴木敏則 1985 「第6章 弥生時代～古墳時代の土器」『三沢西原遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第4集 菊川町教育委員会
- 鈴木敏弘 1993 「午王山遺跡発掘調査報告書」和光市教育委員会
- 谷井彪・高山清司 1968 「大和町の遺跡と出土土器（弥生時代・古墳時代）」『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会
- 滝沢 浩他 1975 「赤塚氷川神社北方遺跡」文化財シリーズ29集 板橋区教育委員会
- 東海埋蔵文化財研究会 1991 「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」I 発表要旨・追加資料篇
- 中嶋郁夫 1981 「〔Ⅷ〕まとめ」『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告1』磐田市教育委員会
- 中嶋郁夫 1985 「弥生土器から土師器への画期 ―遠江地方を中心として―」『古墳時代の土師器』静岡県考古学会シンポジウム6 静岡県考古学会
- 中嶋郁夫 1988 「いわゆる『菊川式』と『飯田式』の再検討」『転機』第2号
- 中嶋郁夫 1993 「東海地方東部における後期弥生土器の『移動』・『模倣』」『転機』第4号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回東海埋蔵文化財研究会 論考篇
- 比田井克仁 1993 「山中式・菊川式東進の意味すること」『転機』第4号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回東海埋蔵文化財研究会 論考篇
- 松本 完 1993 a 「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚―久保哲三先生追悼論文集』
- 松本 完 1993 b 「東海系土器群の受容と変容―南関東地方の事例について―」『転機』第4号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回東海埋蔵文化財研究会 論考篇

4 ^{うつと} 熨斗 (火のし) について

熨斗 (火のし) とは、熱によって衣類などをすす道具であり、今のアイロンの役目をはたすものである。熨斗は主に銅でできた火皿と柄とからなり、炭を入れて火皿を熱し、その平らな底をおしつけることによって皺をのばすことができる。電化製品が氾濫している今の家庭ではほとんどみることができないが、西洋のアイロンが普及しはじめる昭和20年代頃までは、どこでもよく使われていた日常的な生活道具であった。

その反面、考古資料としての熨斗は、全国でも出土例が非常に少なく、特殊な遺物の範疇に入る。本報告の花ノ木遺跡の例を含め、現在まで次の11例が報告されているに過ぎない。

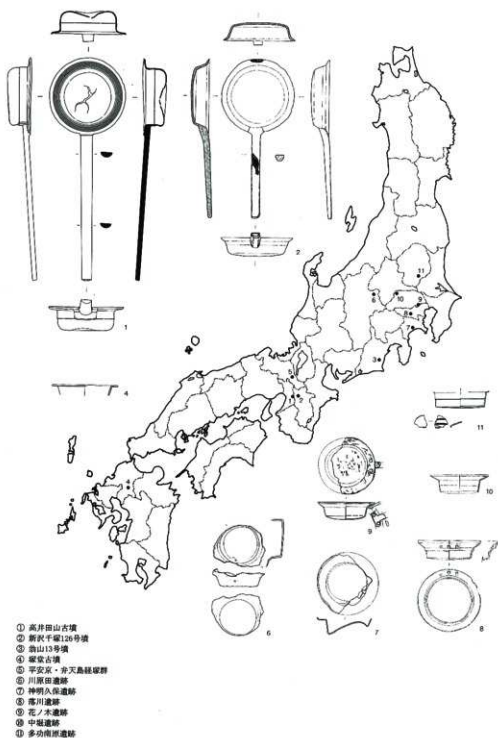
- ①大阪府柏原市 高井田山古墳 (安村・桑野1992)
- ②奈良県橿原市 新沢千塚126号墳 (榎考研1977)
- ③静岡県藤枝市 翁山13号墳 (静岡県1992)
- ④福岡県吉井町 塚堂古墳 1号石室 (児玉他1990)
- ⑤京都府京都市 平安京・弁天島経塚群 (京都市埋文研1980・1986)
- ⑥長野県御代田町 川原田遺跡 H-4号住居跡 (堤・竹原1991)
- ⑦神奈川県平塚市 神明久保遺跡 C-S105 (明石1991)
- ⑧東京都日野市 落川遺跡 第124号掘立柱建物跡 (福田・高林1992)
- ⑨埼玉県和光市 花ノ木遺跡 第7号住居跡 (本報告書)
- ⑩埼玉県上里町 中掘遺跡 遺構外出土 (栗原1992) (注1)
- ⑪栃木県上三川町 多功南原遺跡 46号住居跡 (前沢他1986)

これらのうち、材質は④が金銅製、他はすべて銅製である。遺跡を概観すると、5世紀後半から6世紀初頭の古墳と平安時代の集落遺跡に出土が集中しているのがわかる。

国外に目を向けると、韓半島では百済の武寧王陵 (金他1974) が著名であるが、天馬塚 (文化財管理局1975) や皇南大塚 (文化財研究所1985) など新羅の古墳に多く副葬されている。中国大陸では漢以降の墳墓から連綿と出土しており、比較的よくみられる遺物である。なかには実用に即さない明器と考えられるものや、陶製の模造品も認められる。また、これらの出土例のなかには、灯明皿として使用されていた痕跡をもつものもあるが、これは二次的な使用方法と考えられる (榎考研博1992)。

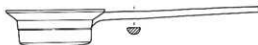
熨斗に関しては国内では毛利光俊彦氏によって整理されているが (毛利光1991)、あまり研究対象として俎上にあげられることはなかった。その理由としては、資料が乏しい特殊遺物であることと、考古学の対象としての歴史的な意義が見いだしにくいとめと考えられよう。

熨斗の基本的な形態は漢から現代に至るまでほとんど変化がないといってよい。そこで今回、研究の基本となる型式分類を行うにあたっては、まず柄の構造に着目し、大分類として次のような4つの型式を設定した。



第397図 各地の契斗

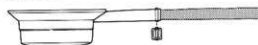
(1) 一体式



(2) 中空式



(3) 木柄挿入式



(4) 鉋留式



第398図 熨斗の諸型式 (模式図)

(1) 一体式

(2) 中空式

(3) 木柄挿入式

(4) 鉋留式

(1)の一体式は、火皿と柄が共造りであるものをいう。全体を一時に鑄造したものか、火皿と柄とを別々な鑄型で造り接着したものかは外面の観察からではわからない。この型式の熨斗は国内では①と②が該当し、韓半島では武寧王陵や皇南大塚北墳から出土している。中国では漢代から唐に至るまで出土例がある。

(2)の中空式は(1)と同様に共造りだが、柄が中空のものをいう。東晉晉陵羅城出土例(鎮江博1986)など中国漢

代の資料に散見される。持ち動かすのに十分な長さを有し、なおかつ目釘孔が見られないことから、次の(3)のように木の柄を挿入したものではないと考えられる。

(3)の木柄挿入式は、中空の柄元に木製の棒を差し込んで柄としたもので、柄元の先端1ヵ所に目釘を打って固定するようにしているのが通例である。韓半島では慶州皇南大塚、天馬塚、皇吾洞4号墳(洪・金他1964)、昌寧校洞7号墳(穴沢・馬目1975)、梁山金鳥塚(樞考研博1992)など類型が多い。国内の考古資料にはみられないが、江戸時代から昭和まで使用されていたのはこの型式の熨斗である。

(4)の鉋留式は別造りの柄を火皿の受口部分で鉋留にする型式である。柄は鉄製のものが多い。柄の装着する部分をT字型につくり、2もしくは3ヵ所鉋を打ち込み固定する。⑨の花ノ木遺跡出土例がこれにあたり、柄が残っていない③⑧⑩も火皿に鉋や鉋留のための孔がみられるのでこの型式に含まれよう。⑥⑦⑪はその確証がないが、火皿胴部に共造りの柄の痕跡がみられないため、鉋留式である可能性がもっとも高いと考えられる。この型式の熨斗は、今のところ韓半島や中国大陸には出土例がみあたらない。

また、熨斗ではないが、この鉋留式の鉄製柄をもつ遺物として銅製の片口杓がある。茨城県新治村武者塚1号墳(岩崎他1986)や山口県萩市見島ジーコンボ116号墳(斎藤・小野1965)、および千葉県柏市花前1遺跡040住居跡(清瀬他1984)から出土している。柄は胴上部に3ヵ所で鉋留めされており、共通した技法がうかがえる。

熨斗の編年は、この4つの大分類にさらに細かい分析を加えることで、ある程度おさえることができると考えられるが、おおざっぱに言えば、一体式から鉋留式へ、中空式から木柄挿入式へと

う型式学的変化をたどると考えられる。この立場から、現段階で筆者らが考える熨斗の変遷のおおよそは次のようなものである。

熨斗は中国のおそらく漢時代に出現したと考えられる。そのころすでに一体式と中空式の両型式のものが存在したが、その主流は一体式のものであった。一体式の熨斗は漢以降、型式学的にあまり大きな変化はなく、中国では唐の頃までその足跡をたどることができる。

5世紀段階になって熨斗は韓半島の古墳に副葬されるようになるが、一体式よりも木柄挿入式のものが多くを占める。これはおそらく中空式のものもともととなって、使用するさい手が熱くないように工夫されたものと推定される。

国内では5世紀後半になって、一体式のものが登場するが、古墳時代後期には熨斗はまったくといってよいほど副葬されなくなり、奈良時代の類例もみあたらない。平安時代(9世紀)になって、ようやく鋳留式の熨斗が普及しはじめたようである。鋳留式は柄とともに鋳造するという一体式のもつ高度な技術を簡略化したものと考えられるが、この移行した時期は確定できない。しかし同巧の片口杓の存在を考慮すると、おそらく6世紀末頃には鋳留式の熨斗が出現していたのではないだろうか。

その後中世から近世にかけては、資料不足のため、その変遷を明らかにできないが、江戸時代には木柄挿入式の熨斗が一般に広く使用されるようになっていたと考えられる。

最後に、日本における熨斗の歴史的意義について少し触れておきたい。中国の文献には「令渾入京、奉熨斗曰、願執柄、以熨天下也。」(『北史李渾伝』)という記述があり、実用品としてばかりではない熨斗の威儀器としての一面を読み取ることができる。しかしながら、古墳時代においては、5世紀後半段階にいくつかが舶載されてきた(注2)ものの、それ以後、祭祀的性格の強い武器や鏡などと伍するものには至らなかった。副葬品として極端に乏しいということは、実用品としても日常的に用いられる道具とはならなかったのであろう。

次に熨斗が遺物として認識されるのは、平安時代に入ってからであり、おもに大規模な集落遺跡から出土している。これらの熨斗が、新たな政治体制のもとでの国内の需要に伴い、改めて輸入されたものなのか、新たに生産されたものなのかは明らかでない。しかし、930年代に編纂された『倭名類聚抄』にはすでに「熨斗所以熨衣裳也」とあり、また「海の面は熨斗のやうにて波も候はぬに」(『今昔物語集』二六-12)と形容される記述があることから、出土例こそきほど多くはないものの、少なくとも平安時代後期には特殊のもでなくなっていたことは充分考えられる。さらに、先述したような型式学的変化が認められるということからも、これらの熨斗(特に鋳留式のもの)がかなり長い間伝世されたものであるという見解(福田・高林1992)には賛同できない。とはいえ、遺物として鎌や刀子のような普遍性がないので、庶民ひとりひとりが手にいれて使うことのできるもの、使う必要があるものではなかったと考えられる。

花ノ木遺跡においては、熨斗を出土した住居跡は大形で遺物も豊富であり、明らかな優位性が認められる。特に、鍵のような「物品管理の主要な道具」(合田1992)が共伴することは、この住居に居住していた人物が、有力者もしくは有力者のもとで財産の管理を命じられた人間である可能性が

強い。他の出土例にはこうした顕著な特徴が見いだせないものの、遺跡自体は平安時代におけるその地域の中核的な集落遺跡とみなされる。特に川原田遺跡や中堀遺跡が寺院との関連が認められる集落であることは、当時の熨斗がどのような階級に使用され、またどのように一般に広まっていったのかを解明するうえでの重要なポイントのひとつといえよう。

以上、花ノ木遺跡の熨斗を出発点とし、熨斗にまつわる問題、特に型式学的分析と歴史的意義について考えてみた。いずれももっと多角的かつ巨視的な視点から熨斗というじみなものについて研究していくつもりであるが、いまだ文献や絵画などを含めた資料収集の途中であり、衣類の歴史および民俗・生活史からのアプローチなども必要である。考えなくてはならない問題は山積しているが、諸研究者の御批判、御教示をいただければ幸いである。

(瀧瀬芳之)

【注】

(1) 中堀遺跡からは1993年度における本事業団の発掘調査において、寺院関連の施設と考えられる瓦葺きの建物跡3棟が検出されている。また新たに熨斗の受口部と考えられる破片も発見されている。

(2) これらの熨斗は、百済ないしは中国東北地方との関連が想定されている(榎考研博1992)。

参考・引用文献

- 明石 新 1991 『新明久保遺跡—第1地区—』平塚市埋蔵文化財調査シリーズ19 平塚市教育委員会
穴沢味光・馬目順一 1975 『昌寧校洞古墳群』『考古学雑誌』第60巻第4号 日本考古学会
岩崎卓也他 1986 『武者塚古墳』新治村教育委員会
榎原考古学研究所編 1977 『新沢千塚126号墳』奈良県教育委員会
榎原考古学研究所附属博物館 1992 『特別展 1500年前のシルクロード 新沢千塚の遺宝とその源流』
京都市埋蔵文化財研究所編 1980 『平安京発掘資料選』
京都市埋蔵文化財研究所編 1986 『平安京発掘資料選』(二)
清瀬一順他 1984 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ—』(財)千
葉県文化財センター他
金元龍他 1974 『武寧王陵』学生社
栗原文蔵 1992 『火熨斗の資料』『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会
洪思俊・金正基 他 1964 『皇吾里四・五号古墳 皇南里破壊古墳発掘調査報告』国立博物館古蹟調査報告
5冊
合田芳正 1992 『いわゆる鎧(クリリ鎧)について』『青山史学』第13号 青山学院大学文学部史学科
児玉真一他 1990 『若宮古墳群Ⅱ』吉井町文化財調査報告書第6集 吉井町教育委員会
斎藤 忠・小野忠恵 1965 『見島古墳群』『山口県萩市見島文化財総合調査報告』山口県教育委員会・萩市
教育委員会
静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古3

- 鎮江博物館 1986 「鎮江市東晉晉陵羅城的調査和試掘」『考古』1986年第5期 科学出版社
- 堤 隆・竹原久子 1991 『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』 御代田町教育委員会
- 福田健司・高林 均 1992 『日野市落川遺跡調査概報』Ⅶ 日野市落川遺跡調査会
- 文化財管理局編 1975 『天馬塚発掘調査報告書』 韓国文化財普及協会
- 文化財研究所編 1985 『皇南大塚Ⅰ（北墳）発掘調査報告書』 文化財管理局
- 前沢輝政他 1986 『多功南原遺跡』 上三川町教育委員会
- 毛利光俊彦 1991 『青銅製容器・ガラス容器』『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣
- 安村俊史・桑野一幸 1992 『高井田山古墳』 柏原市文化財概報1991-II 柏原市教育委員会

晶子形態による黒曜石の原産地推定

町 田 瑞 男

今回原産地推定する試料は5点である。5点とも透明～半透明の試料で、これから和田峠及び霧ヶ峰・八ヶ岳・神津島産のものいずれかであることが肉眼でわかる。また、ウラン濃度から箱根及び和田峠・伊豆半島・神津島・高原山のものではないことがわかる。以上のように産地を狭めることが出来たので、星ヶ塔・星ヶ台・星ヶ峠・男女倉・麦草峠に産地を限って検討を加えた。

晶子形態を調べると星ヶ塔と星ヶ台とは同じ岩体の可能性があり、区別出来なかった。また星ヶ峠も同様同じ岩体の可能性があり、星ヶ塔と星ヶ台と区別できなかった。以上の結果から5点の産地は下記のように推定した。なお、同定するには余りにも時間が無すぎたので、これ以上産地をしぼりこむことが出来なかった。

- | | | |
|-------|-----------|-----------|
| 1 麦草峠 | 2 星ヶ塔・星ヶ台 | 3 星ヶ塔・星ヶ台 |
| 4 麦草峠 | 5 星ヶ塔・星ヶ台 | |

- | | |
|-------------|---------------|
| 1・4 八ヶ岳グループ | 2・3・5 霧ヶ峰グループ |
|-------------|---------------|

参考文献 Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan

PART I — Framework for Reconstructing Prehistoric
Human Activity in Obsidian

By

Masao Suzuki

Journal of the Faculty of Science, The University of Tokyo
Sec. v, vol. IV, Part 3, pp.241-318, pls. I-XII, March 31, 1973

